

満足度・生活の質に関する調査報告書 2024

～我が国の Well-being の動向～

令和6年8月

内閣府 政策統括官（経済社会システム担当）

目 次

はじめに	-----	2
第 1 章 満足度・生活の質の動向		
第 1 節 満足度の全般的な動向	-----	3
第 2 節 満足度の過去、現在、未来の動向	-----	14
第 3 節 働き方（転職・起業・副業・就業意向）と満足度	-----	24
第 4 節 重視事項と評価事項の関係	-----	36
第 2 章 満足度・生活の質指標群とその活用		
第 1 節 各国政府・地方の指標群とその活用状況	-----	46
第 2 節 内閣府「満足度・生活の質に関する調査」について	-----	53

はじめに

内閣府では我が国の経済社会の構造を人々の満足度（Well-being）の観点から多面的に把握する取組として、「満足度・生活の質に関する調査」を実施してきた。

過去の研究や同様の取組も参考に進めた研究の結果、生活の幅広い範囲について包括的に評価できる体系として、総合的な主観満足度の他、分野別の満足度とそれに関連する意識や指標を問う調査形式を構築している。

これまでの調査報告書においては、各年の調査結果について時世やデータの特徴的な動きをまとめるとともに、指標の整備拡充に向け、様々な分析を行ってきた。

例えば、2019年の第2次調査報告書では、基本的な分析に根差した分野別の指標群（ダッシュボード）を構築し、2020年の第4次報告書において、暮らし方や働き方と満足度の関係を調査分析した上で、この指標群の改定を行った。また、第4次報告書では、総合的な生活満足度と分野別の満足度の関係についても分析している。

2021年、2022年の調査報告書では、各時期の特徴に着目した分析として、新型コロナウイルス感染症の拡大がもたらした行動変容について分析しており、2021年の調査報告書では回答者の過半数が前年調査からの継続サンプルである長所を活かし、感染症の前後で同一回答者の満足度やそれを取り巻く指標がどのように変化したのかを明らかにしている。また、2022年の調査報告書では長引く感染症下において定着したと考えられる社会活動の変化が満足度へ与えた影響について分析を行った。

2023年の調査報告書では、近年の社会情勢を踏まえ、家族構成、将来不安、仕事への意識等が生活満足度にどのように影響しているのか分析を行った。

今回の報告書では、第1章において、満足度の動向を包括的に確認するとともに、満足度の過去、現在、未来の動向、働き方と満足度の関係、重視事項と評価事項の関係等に関する分析を行った。第2章では、近年満足度調査の実施に留まらず、実際の政策プロセスにWell-being指標を活用する試みが広まっていることを踏まえ、各国政府及び地方公共団体におけるWell-being指標の政策への活用事例について紹介するとともに、調査方法の違いによる満足度への影響の検証を行っている。

第1章 満足度・生活の質の動向

内閣府では、これまで5回にわたって、主観的 Well-being の代表的な指標として現在の生活にどの程度満足しているかを0～10点で自己評価する総合的な生活満足度を中心に、客観的指標と紐づける分野別満足度やこれに関する意識など幅広い情報を集める調査¹を実施してきた。まずは、この経年の満足度の動向を確認する。

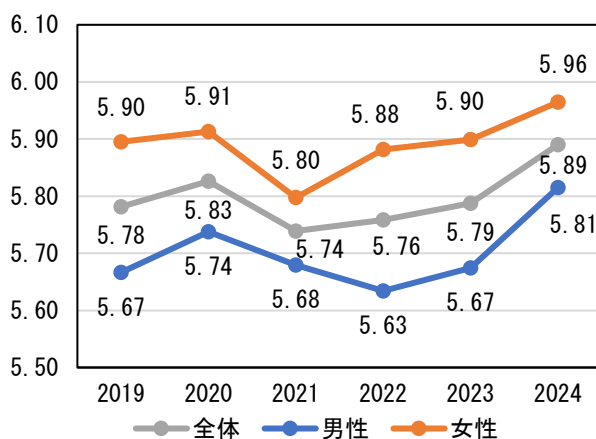
第1節 満足度の全般的な動向

1. 総合的な生活満足度の推移

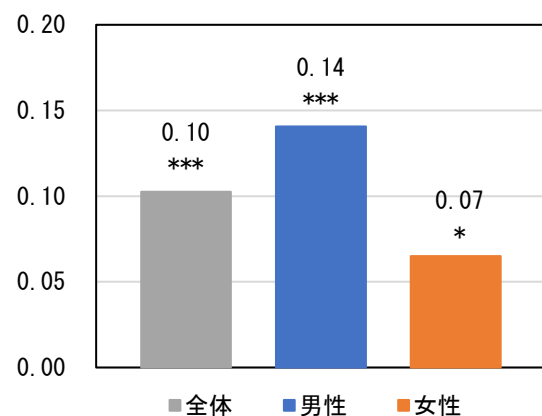
総合的な生活満足度(以下「生活満足度」)は、全体の平均が5.89と前回調査(2023年2月)の5.79から0.1ポイント上昇し、調査開始以来で最も高い水準となっており、上昇幅も過去最大となっている。男女別にみると、男性は昨年より0.14ポイント上昇、女性は0.07ポイント上昇しており、ともに統計上有意な差が認められた²。なお、これまでの調査と同様、男性よりも女性の方が水準は高い。

図表1-1-1 生活満足度の推移と前回調査からの変化(男女別)

(1) 推移



(2) 前回調査からの変化



(備考)***、*はそれぞれ1%、10%で有意

(すべての年齢階層で生活満足度が上昇)

年齢階層別に若年層(39歳以下)、ミドル層(40歳-64歳)、高齢層(65歳以上)について生活満足度をみると、その水準は、高齢層で高く、ミドル層で低い傾向がある。今回調査では、前回調査からすべての年齢階層で上昇しており、高齢層を除き、統計上有意な差が認められている。若年層では0.12ポイント、ミドル層では0.09ポイント、高齢層では0.06ポイント、それぞれ上昇したものの、ミドル層で

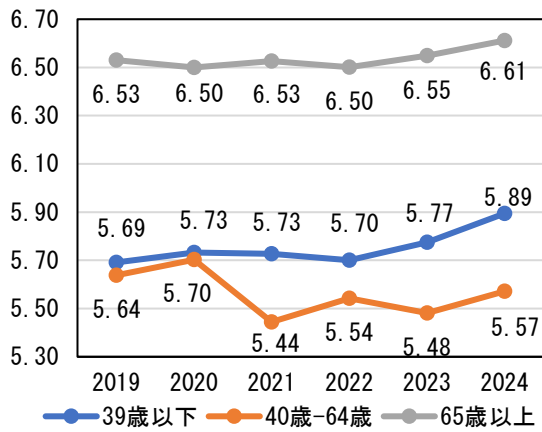
¹ 調査の詳細は、第2章第2節を参照。

² 本報告における統計的有意性の検定は、継続サンプルの異時点間比較に関しては「対応のあるデータ」として行ったが、一部でも新規サンプルが含まれている場合には、「対応のないデータ」とみなして行った。

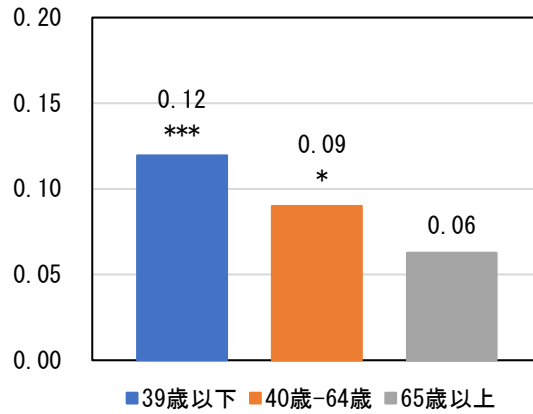
はコロナ拡大前の水準を回復するまでには至っていない。

図表 1-1-2 生活満足度の推移と前回調査からの変化（年齢階層別）

(1) 推移



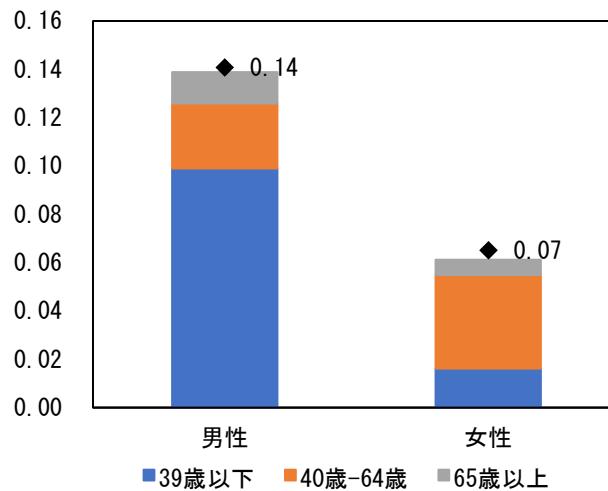
(2) 前回調査からの変化



(備考)***、*はそれぞれ1%、10%で有意

男女別でみた全体の変化に年齢階層別の変化がどの程度寄与したのかをみると、男性では若年層が、女性ではミドル層が全体の生活満足度上昇に大きく寄与したことがわかる。

図表 1-1-3 男女別・年齢階層別の生活満足度変化の寄与

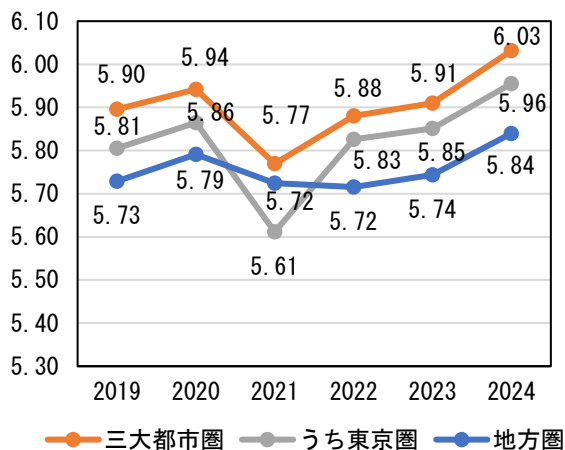


(前回調査に引き続き三つの地域類型全てで生活満足度が上昇)

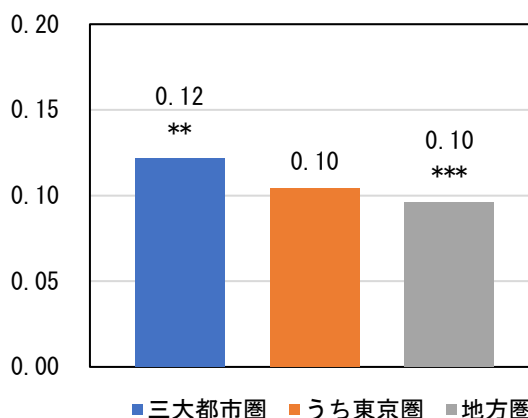
地域別の満足度の動向をみると、前回調査に引き続き三大都市圏³、東京圏、地方圏⁴の全てにおいて上昇し、そのうち三大都市圏、地方圏では統計上有意な差が認められた。

図表 1-1-4 生活満足度の推移と前回調査からの変化(地域別)

(1) 推移



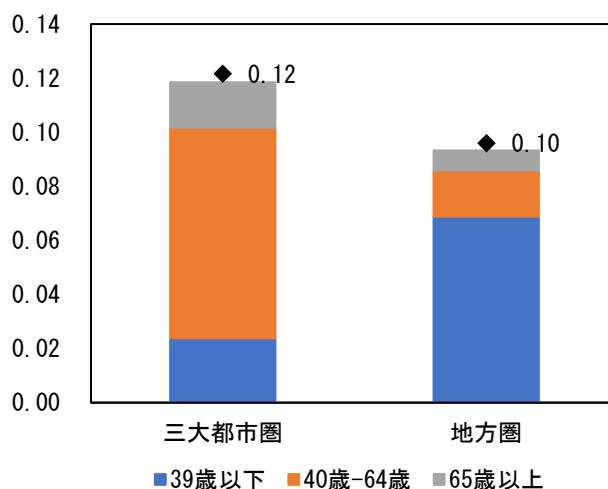
(2) 前回調査からの変化



(備考)***、**はそれぞれ1%、5%で有意

地域別でみた全体の変化に年齢階層別の変化がどの程度寄与したのかをみると、三大都市圏ではミドル層が、地方圏では若年層が全体の生活満足度上昇に大きく寄与したことがわかる。

図表 1-1-5 地域別・年齢階層別の生活満足度変化の寄与



³ 東京圏(東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県)、名古屋圏(愛知県・三重県・岐阜県)、大阪圏(大阪府・京都府・兵庫県・奈良県)を指す。

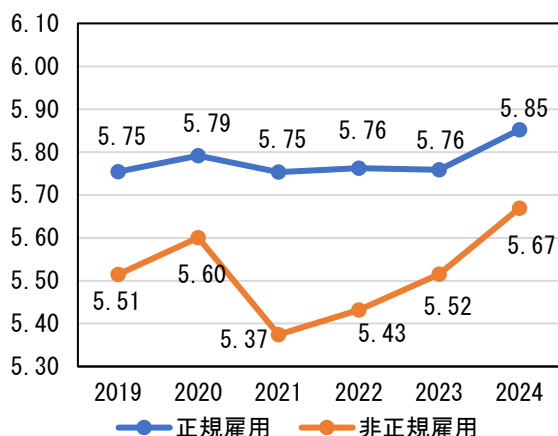
⁴ 三大都市圏を除く道県を指す。

(就業者の生活満足度が上昇)

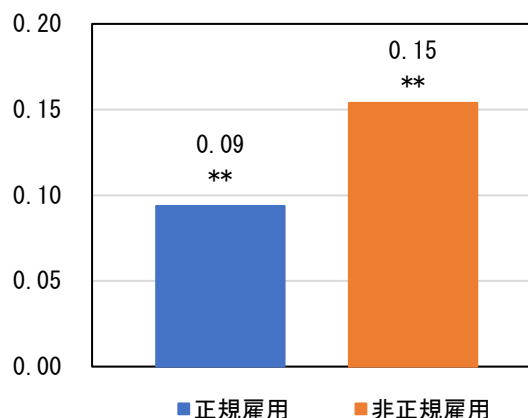
就業者の満足度の動向を雇用形態別にみると、正規雇用は前回調査から 0.09 ポイント上昇、非正規雇用は 0.15 ポイント上昇し、調査開始から一番大きい上昇幅となっている。非正規雇用は正規雇用に比べて、コロナ禍の影響を大きく受けたことが伺えるが、その後は上昇傾向にあり、正規雇用との水準差は縮小している。

図表 1-1-6 生活満足度の推移と前回調査からの変化（雇用形態別）

(1) 推移



(2) 前回調査からの変化



(備考)**は 5%で有意

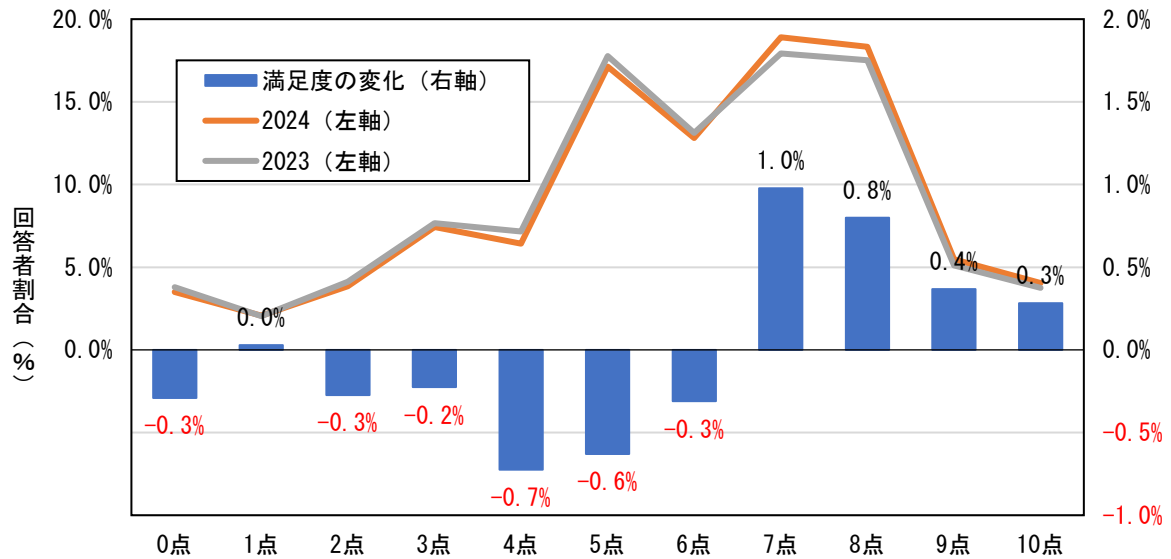
2. 生活満足度の分布

(満足度は前回調査に引き続き 5、7、8 点に集中)

生活満足度の点数別の分布をみると、最頻値は 7 点 (18.9%)、ついで 8 点 (18.3%)、5 点 (17.1%) となり、全体の約 67%が 5～8 点に集中している。過去 5 回の調査の分布と比べて、分布の形状は大きく変わらない⁵。

⁵ 分野別満足度についても、同様に点数別の分布を確認すると、「生活の楽しさ・面白さ」及び「身の回りの安全」満足度は生活満足度と似た山型となったが、それ以外の分野についてはそうした傾向は見られなかった。

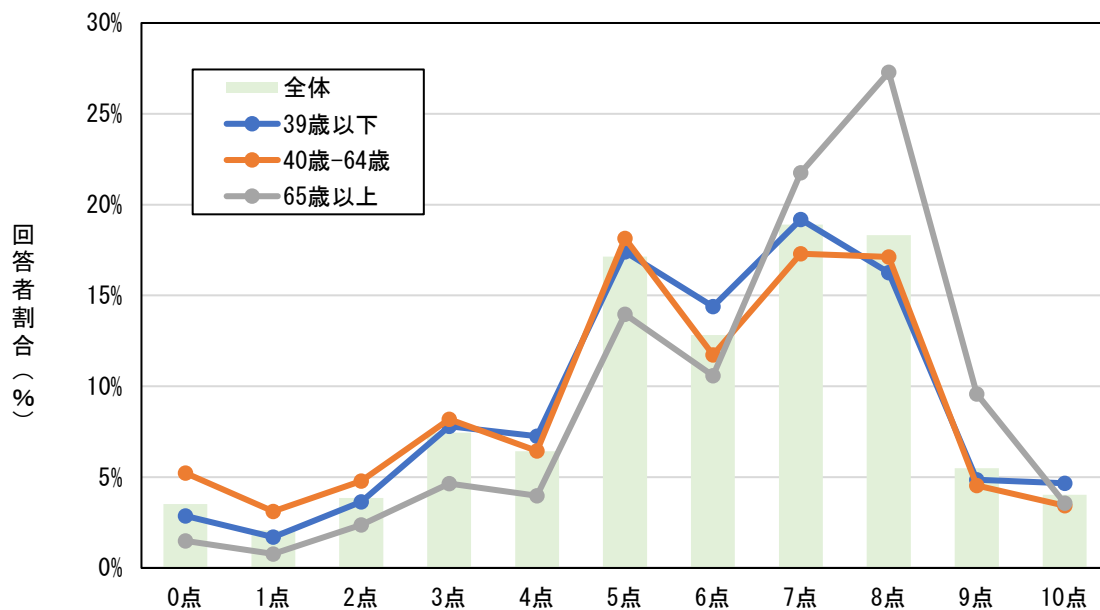
図表 1-1-7 生活満足度の点数別の分布（回答者割合）と1年間の変化



（若年層・ミドル層は5点、高齢層は8点に集中）

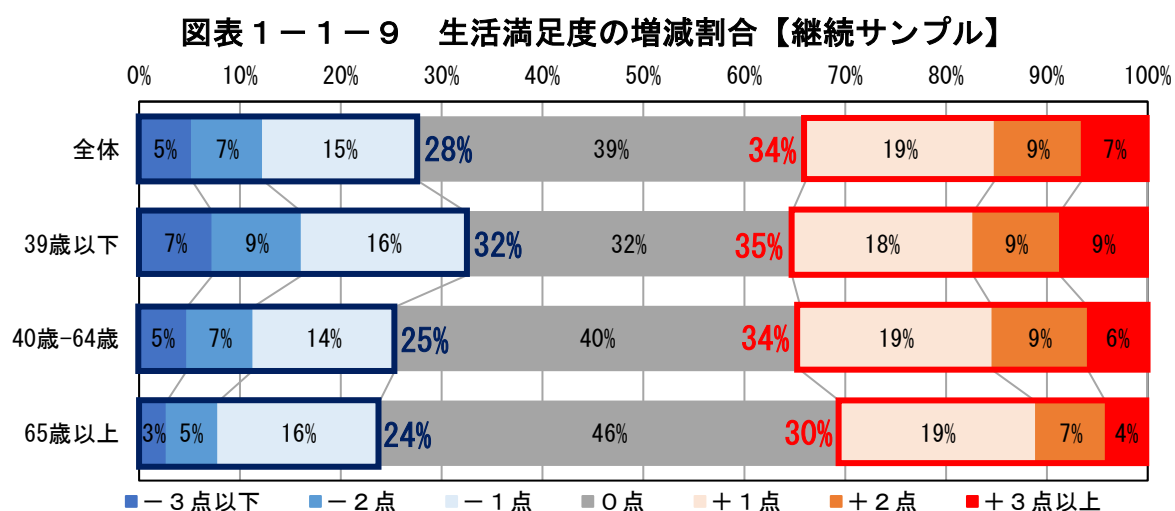
生活満足度の点数別の分布を年齢階層別に分けてみると、高齢層の最頻値は8点（27.3%）、ついで7点（21.8%）となり、ミドル層の最頻値は5点（18.1%）、ついで7点（17.3%）、若年層の最頻値は7点（19.2%）、ついで5点（17.4%）となる。

図表 1-1-8 生活満足度の点数別の分布（年齢階層別）



（継続回答者の生活満足度変化）

本年調査のサンプルの一部（5,550人）は、前回調査に引き続いての回答者である。生活満足度の水準の変化は全体サンプルと同様な傾向であるものの、この継続サンプルに限って個人の生活満足度の変化をみることができる。これによると、およそ3割程度の人々の満足度がそれぞれ上昇または低下しており、上昇した割合が低下した割合を6.3%上回った。さらに年齢階層別にみると、すべての年齢階層で満足度が上昇した割合の方が低下した割合を上回った。



3. 分野別満足度の動向

本調査では、生活全体について問う生活満足度を客観的指標と結びつけるよう、13の分野について満足度を尋ねている⁶ことから、その動向を確認する。

（分野別満足度の変化）

分野別満足度について、前回調査からの動きに着目すると、生活満足度と同様に、殆どの項目で上昇⁷しており、「健康状態」「政治・行政・裁判所への信頼性」「自然環境」以外は統計的に有意な上昇がみられた。

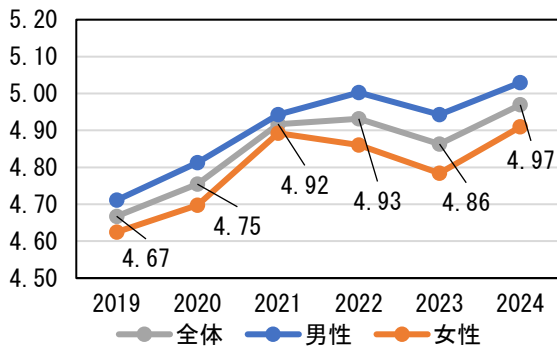
男女別にみると、ほとんどの分野別満足度において男性の方が女性よりも上昇幅が大きくなっている。例えば、「仕事と生活（WLB）」や「健康状態」「社会とのつながり」では、女性は横ばい、ないしはマイナスとなっているに対し、男性は0.1ポイント程度上昇している。その一方で、「家計と資産」では、男性よりも女性の上昇幅が大きくなっている。

⁶ 各分野別満足度については第2章第2節を参照。

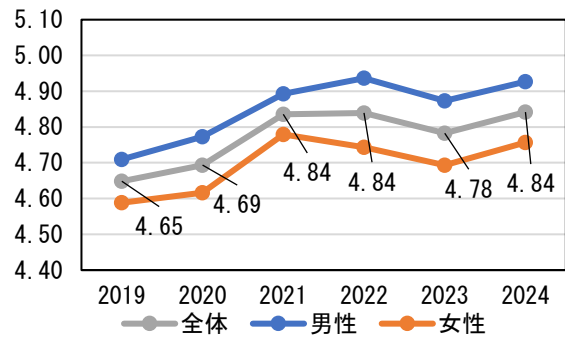
⁷ 分野別満足度のうち「政治・行政・裁判所への信頼性」のみ前回調査と比較して低下しており、第1回～第3回調査と同程度の水準となっている。

図表 1-1-10 分野別満足度の推移

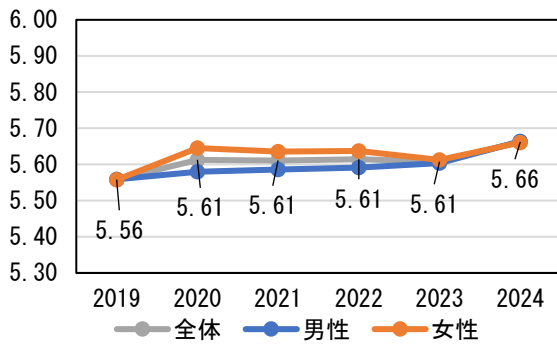
(1) 家計と資産



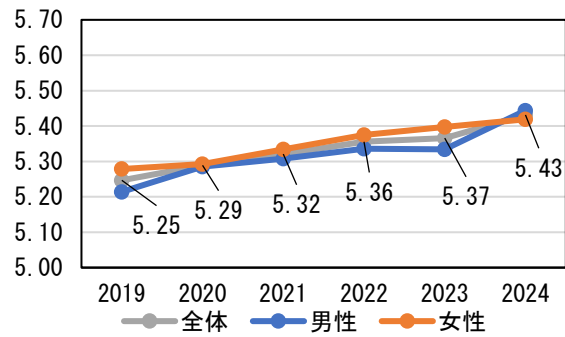
(2) 雇用環境と賃金



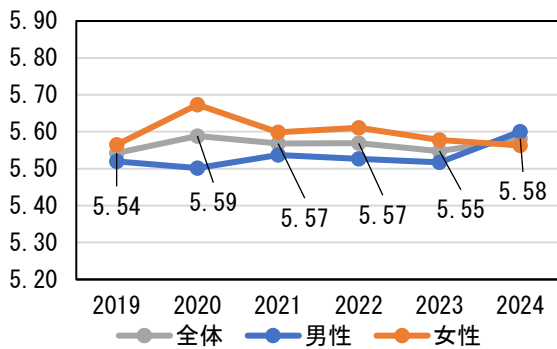
(3) 住宅



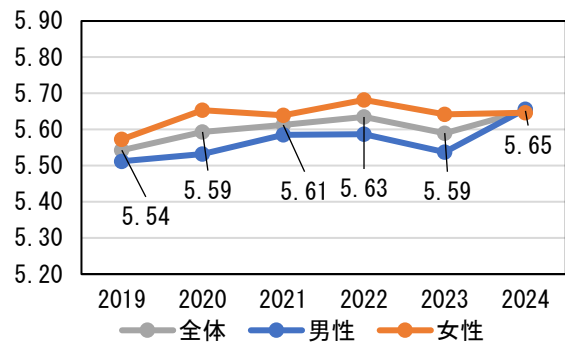
(4) 仕事と生活 (WLB)



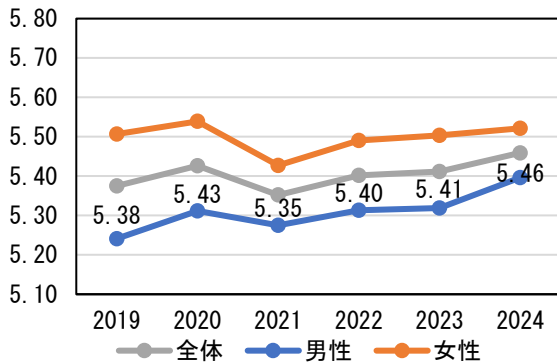
(5) 健康状態



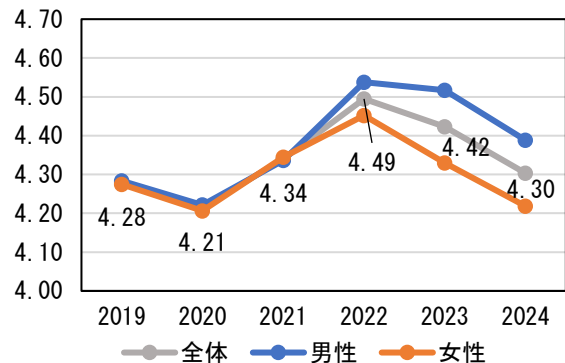
(6) 自身の教育水準・教育環境



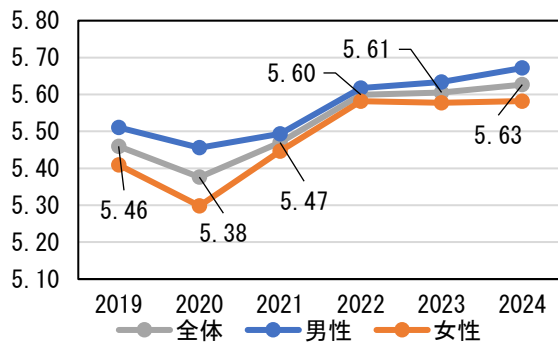
(7) 社会とのつながり



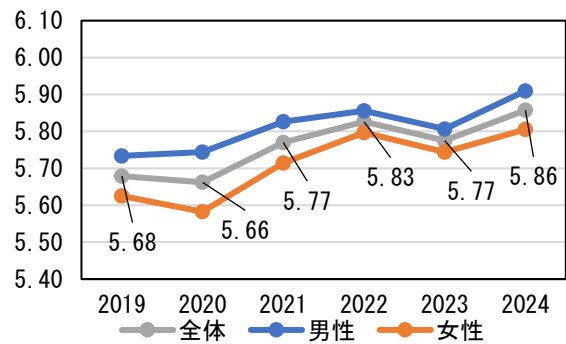
(8) 政治・行政・裁判所への信頼性



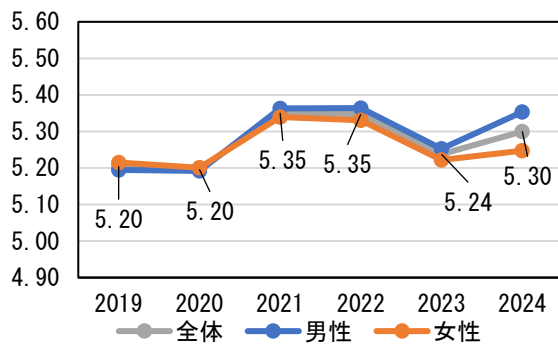
(9) 自然環境



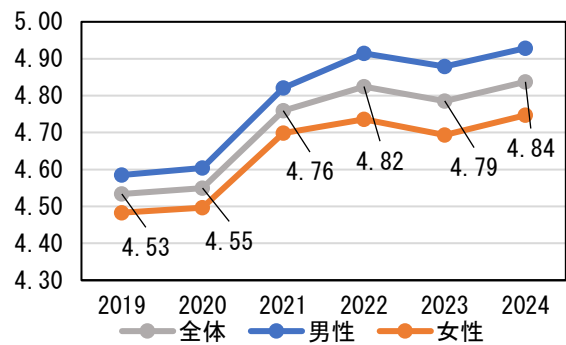
(10) 身の回りの安全



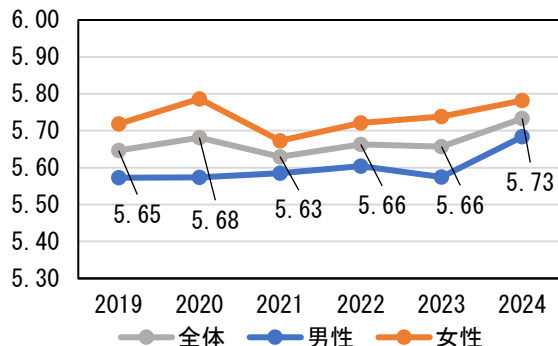
(11) 子育てのしやすさ



(12) 介護のしやすさ・されやすさ



(13) 生活の楽しさ・面白さ



(分野別満足度と生活満足度の関係)

各分野別満足度と生活満足度との関係は、分野によって異なる。図表1-1-11は、生活満足度を13の分野別満足度で重回帰分析したものであるが、最も回帰係数が大きいのは、「生活の楽しさ・面白さ」であり、次いで「家計と資産」、「健康状態」となる⁸。これらの関係性は、一部において男女で差があり、「雇用環境と賃金」、「交友関係やコミュニティなど社会とのつながり」、「子育てのしやすさ」については、男性で有意に正の係数が認められるが、女性では有意ではない。また、「身の回

⁸ 各分野別満足度間の相関係数をみると、ほとんどの組み合わせで0.5を超えているのに加え、「家計と資産」と「雇用環境と賃金」のように0.7以上の組み合わせも存在する。このため、説明変数間で一定程度の相関が発生しており、回帰結果をもとに各変数の説明力を判断することについては一定の留意が必要。

りの安全」については、女性で有意に正の係数が認められるが、男性では有意ではない。

図表 1-1-11 分野別満足度と生活満足度の関係

被説明変数：生活満足度

	全体	男性	女性
家計と資産	0.234 ***	0.223 ***	0.241 ***
雇用環境と賃金	0.030 **	0.076 ***	-0.005
住宅	0.082 ***	0.073 ***	0.089 ***
仕事と生活（ワークライフバランス）	0.081 ***	0.103 ***	0.063 ***
健康状態	0.128 ***	0.127 ***	0.130 ***
教育水準・教育環境	0.044 ***	0.045 ***	0.046 ***
交友関係やコミュニティなど社会とのつながり	0.061 ***	0.092 ***	0.023
政治・行政・裁判所への信頼性	-0.015	-0.008	-0.025 *
生活を取り巻く空気や水などの自然環境	-0.027 **	-0.024	-0.031 *
身の周りの安全	0.013	-0.002	0.035 *
子育てのしやすさ	0.035 ***	0.055 ***	0.016
介護のしやすさ・されやすさ	-0.085 ***	-0.106 ***	-0.065 ***
生活の楽しさ・面白さ	0.394 ***	0.350 ***	0.427 ***
定数項	0.488 ***	0.297 ***	0.686 ***
修正済み決定係数	0.637	0.654	0.624
サンプルサイズ	10633	5296	5337

(備考)***、**、*はそれぞれ 0.5%、2.5%、5%で有意

(男女別・年齢階層別でみた変化)

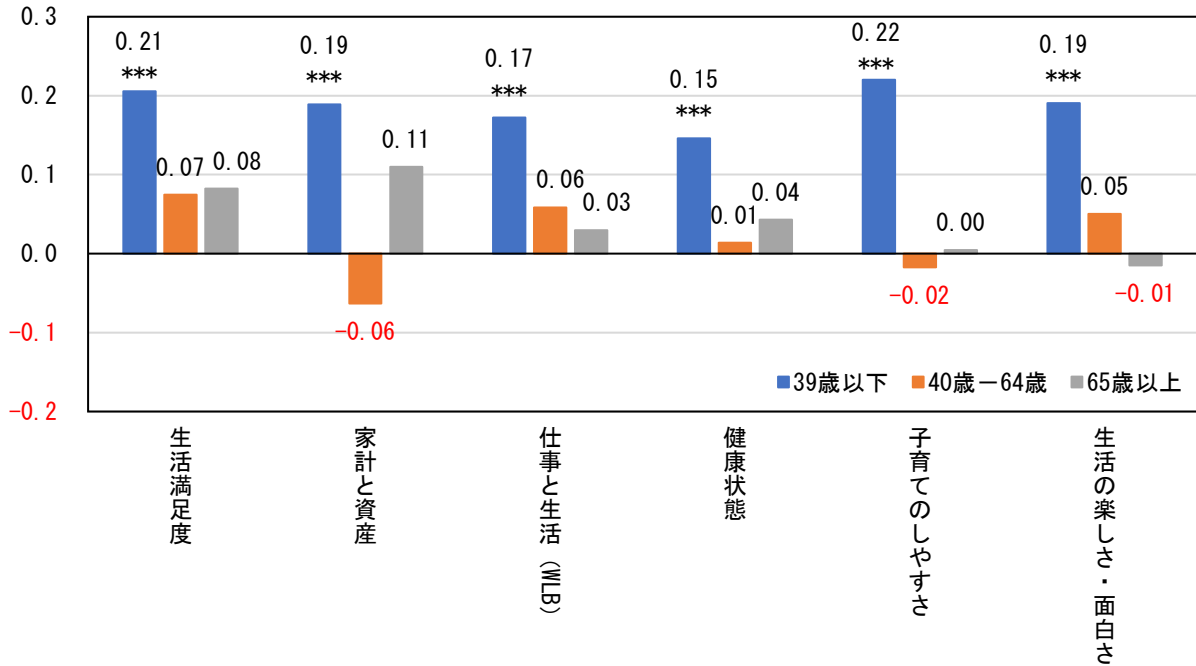
図表 1-1-11 において回帰係数が比較的大きい分野および図表 1-1-10 で男性と女性の前回調査からの変化が異なる動きを見せている分野に注目して、男女別かつ年齢階層別に、その変化を確認する。注目する分野は、「家計と資産」、「仕事と生活（WLB）」、「健康状態」、「子育てのしやすさ」、「生活の楽しさ・面白さ」である。

まず、生活満足度について、男性・女性ともに全ての年齢階層で上昇しており、特に男性では若年層、女性ではミドル層で統計上有意に上昇した。

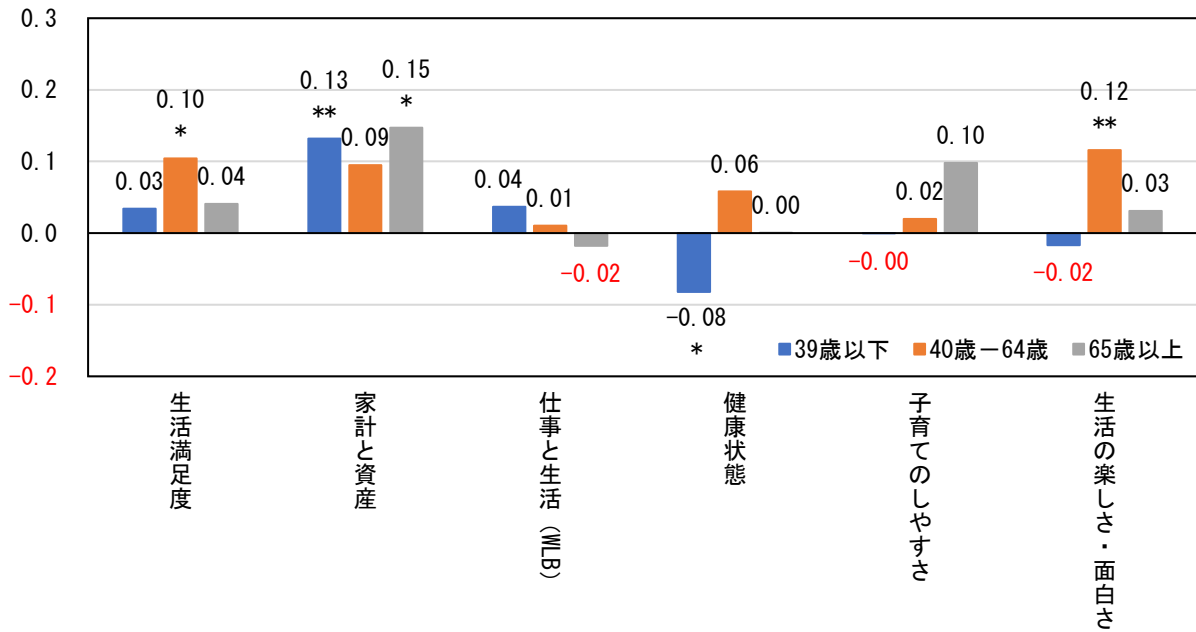
各分野については、男性の若年層における伸びが際立っており、今回注目した全ての分野で統計上有意に上昇した。女性については、全ての年齢階層で「家計と資産」が上昇しており、なかでも若年層と高齢層で統計上有意に上昇した。

図表 1-1-12 分野別満足度の変化（男女別・年齢階層別）

(1) 男性



(2) 女性

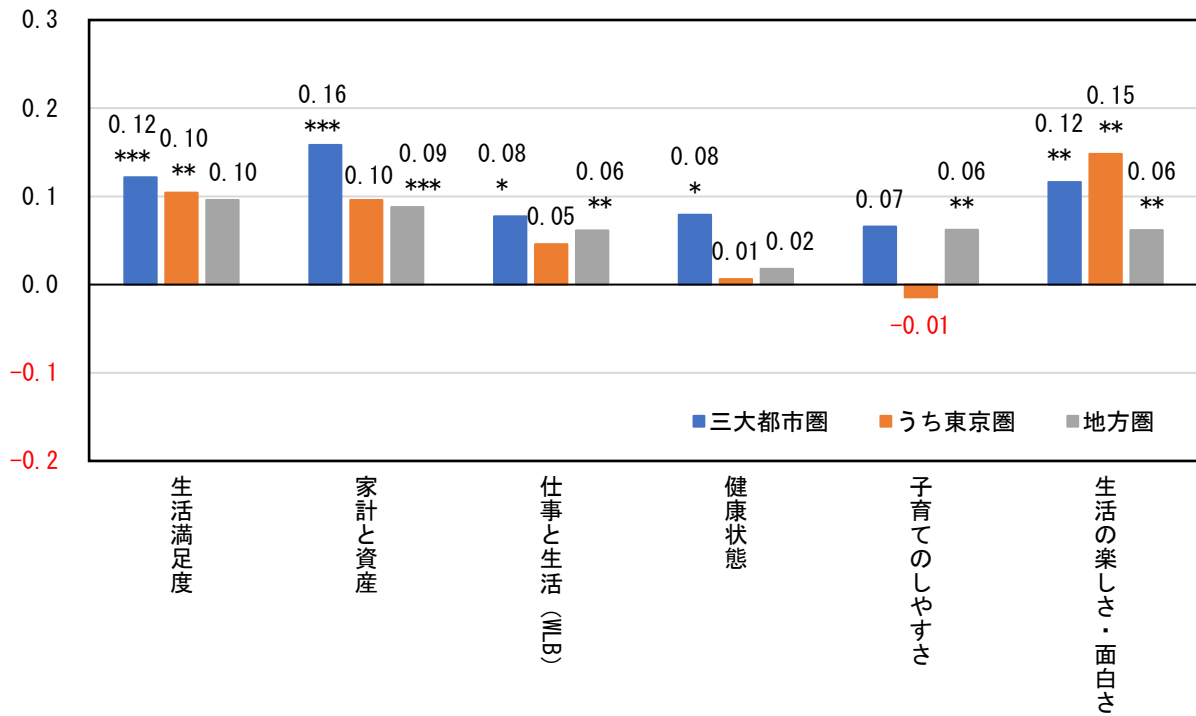


(備考) ***, **, *はそれぞれ 1%、5%、10%で有意

(地域別でみる変化)

地域別に確認すると、生活満足度および「家計と資産」、「生活の楽しさ・面白さ」満足度は、都市圏および地方圏ともに大きく上昇した。なかでも「生活の楽しさ・面白さ」満足度については、全ての地域で統計上有意な上昇が認められた。

図表 1-1-13 分野別満足度の変化（地域別）



(備考) ***, **, *はそれぞれ 1%、5%、10%で有意

第2節 満足度の過去、現在、未来の動向

第1章の冒頭でも述べたとおり、5年前の2019年に調査を開始し、今回に至るまで、計6回の調査を実施した。本節では、この5年間のタイムラグに注目し、現在を起点として5年前を回顧した満足度や5年後を予想した満足度を中心に分析していく。

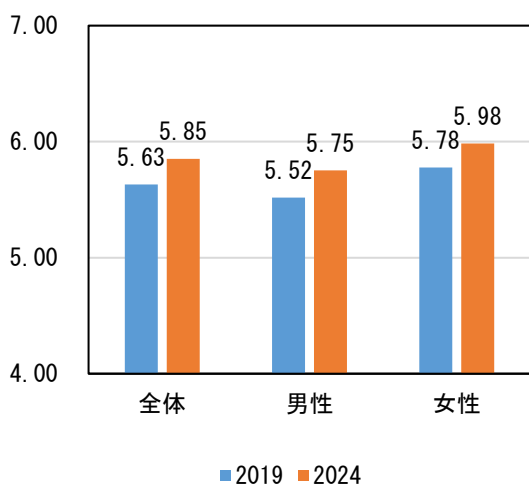
1. パネルデータ分析に基づく生活満足度の動向

まず、5年前及び今回の調査で回答があったサンプル（2,680人）を紐づけたパネルデータに限定して、生活満足度を第1回調査（2019年2月）と比較すると、第6回調査は5.85と、第1回調査の5.63から0.22ポイント上昇している。男女別にみても、女性よりも男性の方がわずかに上昇しているものの、同程度の変化幅となっている。

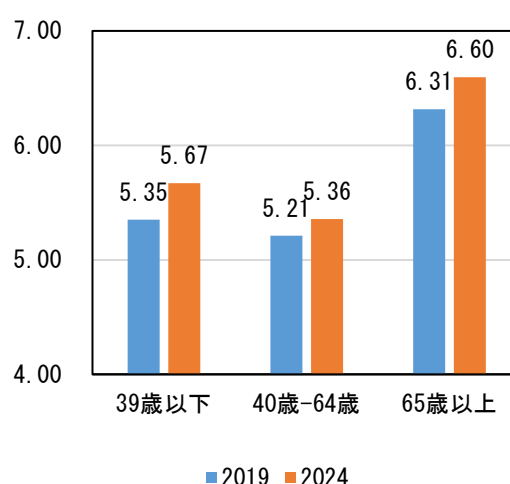
年齢階層別にみると、若年層と高齢層は0.3ポイント前後と同程度上昇しているのに対し、ミドル層の上昇幅はその半分程度にとどまっている。

図表1-2-1 5年間の生活満足度の変化

(1) 男女別



(2) 年齢階層別

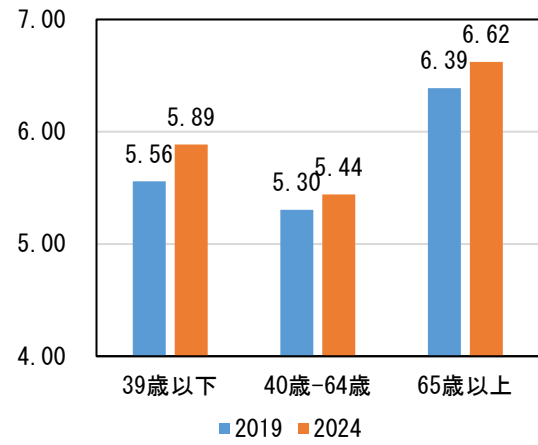
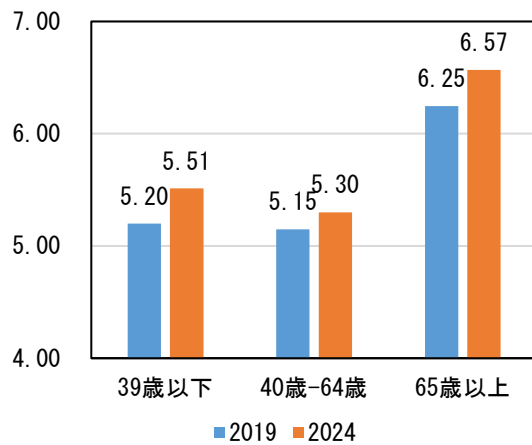


次に、年齢階層別の満足度変化を男女ごとに確認すると、男女ともにミドル層の上昇幅が最も小さくなっている。男性では、若年層と高齢層の変化幅に違いはないが、女性では、若年層の方が高齢層より大きく上昇している。

図表 1-2-2 5年間の生活満足度の変化（年齢階層別・男女別）

(1) 男性

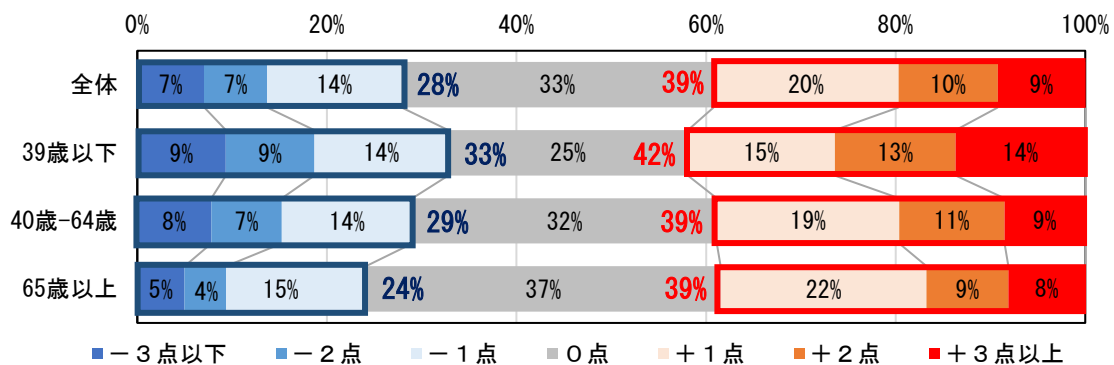
(2) 女性



（5年の経過による生活満足度の変化）

パネルデータそれぞれの生活満足度の変化に着目すると、およそ4割程度の人が5年の経過によって満足度が上昇しているのに対し、3割程度の方は満足度が低下している。上昇した人の割合が低下した人の割合を11.3%上回り、すべての年齢階層で、満足度が上昇した割合が低下した割合を上回っている。年齢層ごとの変化増減について確認すると、若年層の上昇した割合がミドル層や高齢層のそれより高く、それに比例して低下した割合も高くなっている。

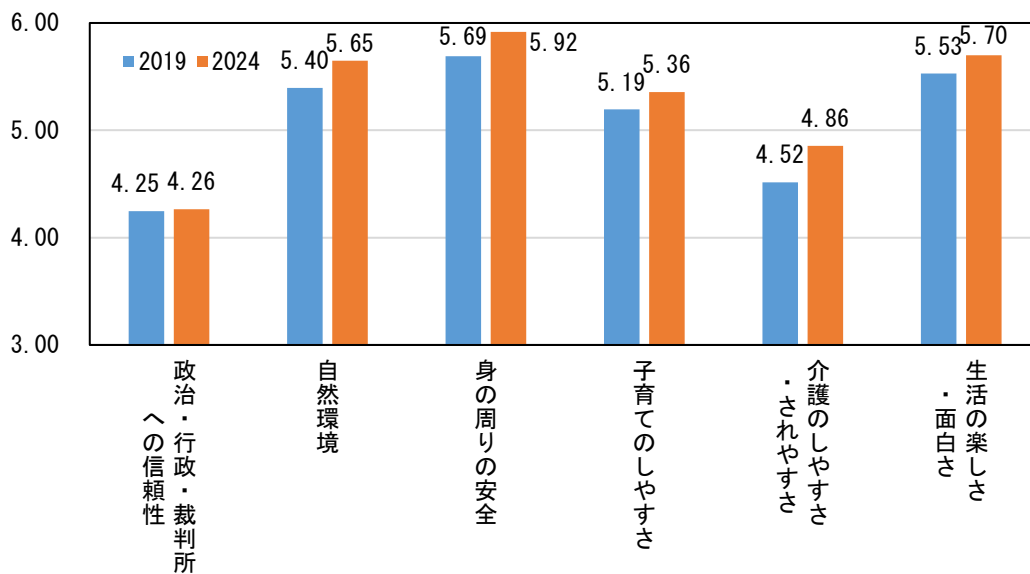
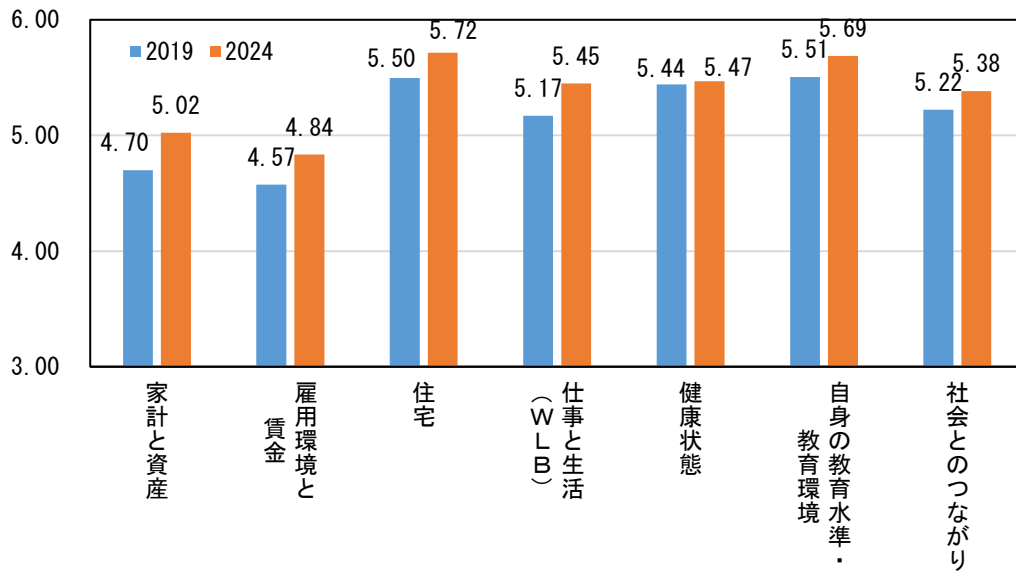
図表 1-2-3 5年間の生活満足度の増減割合（年齢階層別）



（5年の経過による分野別満足度の変化）

次に分野別満足度の変化を確認する。第6回調査と第1回調査を比較すると、全ての分野で横ばい、ないしは上昇していることがわかる。また、変化の幅が大きい分野として、「介護のしやすさ・されやすさ」、「家計と資産」、「仕事と生活（WLB）」が挙げられ、一方で、「健康状態」や「政治・行政・裁判所への信頼性」といった分野は変化の幅が小さい。

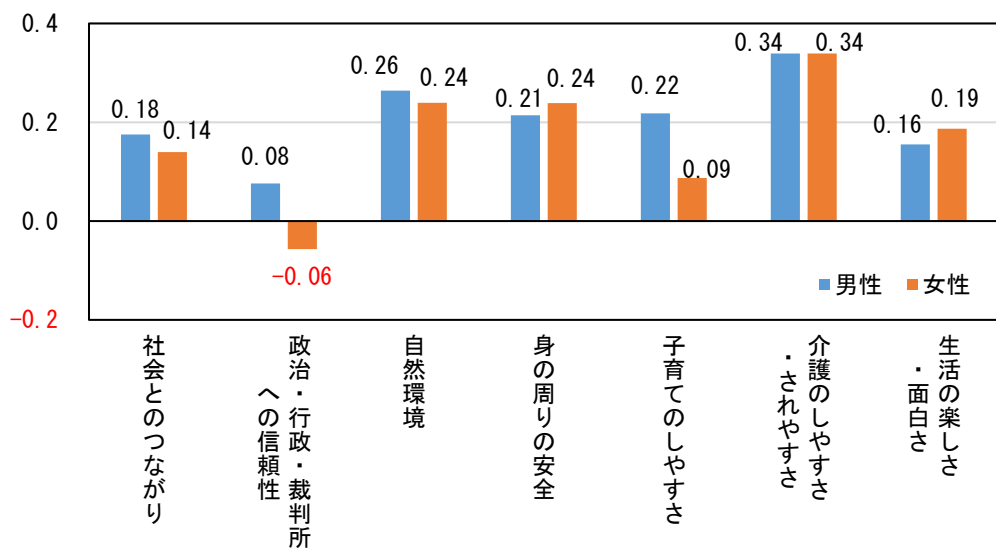
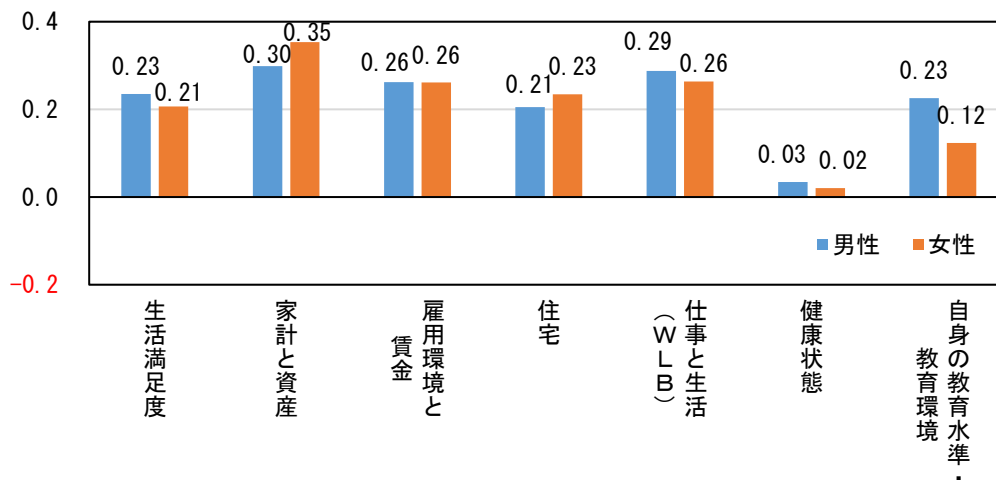
図表 1-2-4 5年間の分野別満足度の変化



(男女別の分野別満足度の変化幅)

続いて、男女ごとに分野別満足度の変化幅を確認する。男女別にみると、「自身の教育水準・教育環境」や「子育てのしやすさ」では変化幅に差があり、男性の方が女性よりも大きく上昇している。また、「政治・行政・裁判所への信頼性」では、男性が上昇しているのに対し、女性は低下している。女性と比べ男性の上昇幅が大きい分野が太宗を占めるものの、「家計と資産」においては、女性の方が大きくなっている。

図表 1-2-5 分野別満足度の変化幅（男女別）

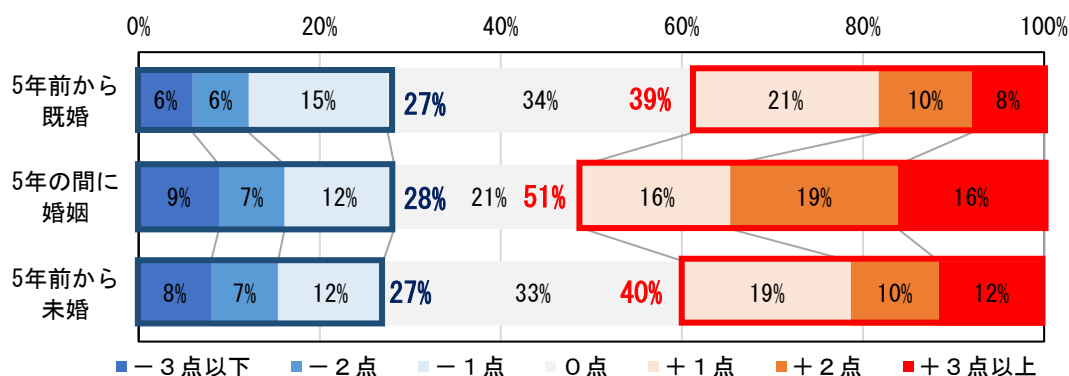


（婚姻状況の変化による満足度への影響）

5年間のパネルデータであるため、その間に発生した属性の変化に着目した分析が可能となる。

まずは、婚姻状況に応じた生活満足度の変化について確認する。「5年前から既婚」「5年の間に婚姻」「5年前から未婚」の3類型に分けて比較すると、この5年の間に結婚をした人のうち、約5割の人の満足度が上昇しており、顕著に多くなっている。一方で、満足度が低下した割合については、その他の人と変わらず、3割程度となっている。

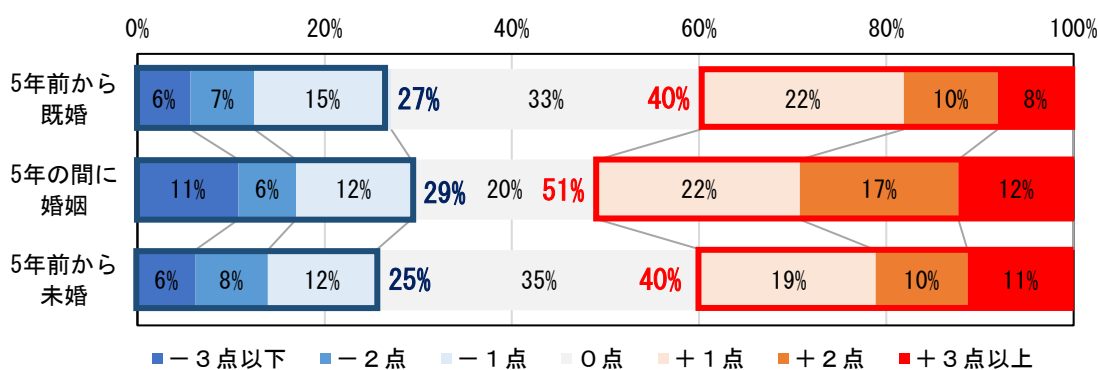
図表 1-2-6 生活満足度の増減割合（婚姻状況別）



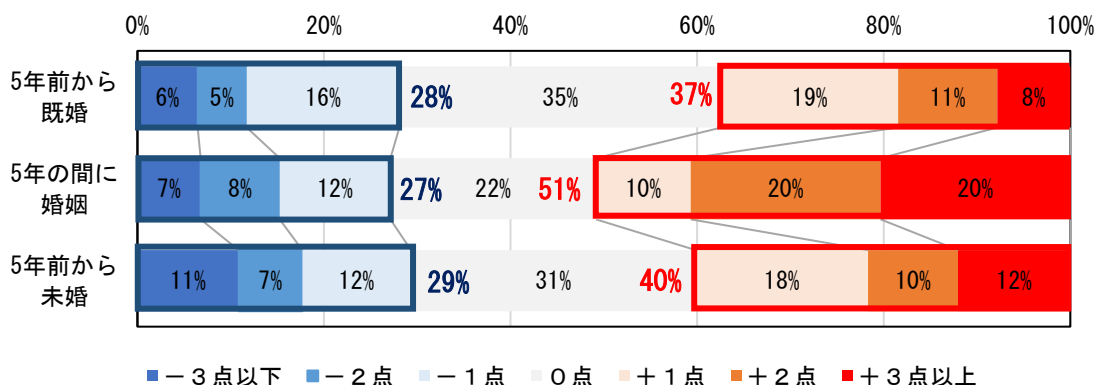
次に、男女ごとに分けて比較すると、あまり大きな違いはないものの、5年の間に結婚した女性は、男性よりも満足度水準が大きく上昇した人の割合が高くなっている。

図表 1-2-7 生活満足度の増減割合（婚姻状況別・男女別）

(1) 男性



(2) 女性

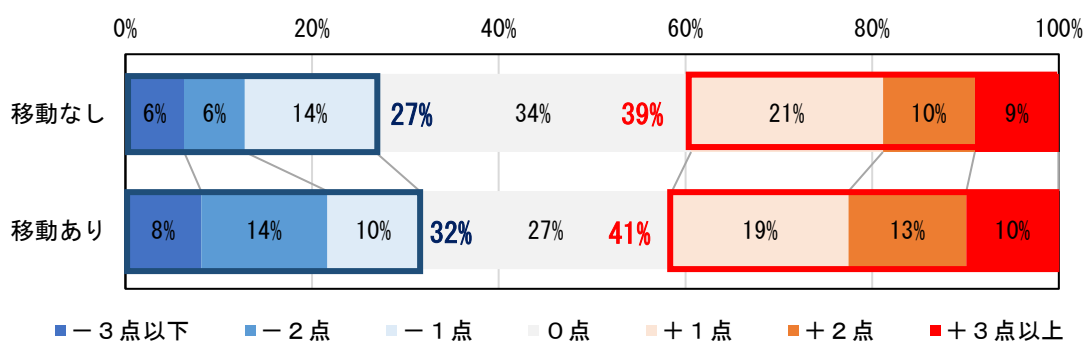


(居住地の変化による満足度への影響)

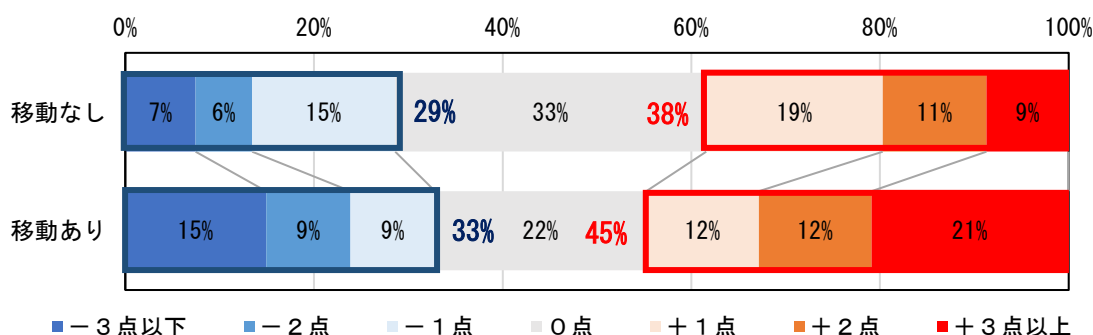
次に、5年前と比較し、県をまたいだ居住地の移動の有無の観点から、満足度を確認する。男女別でみるといずれにおいても県をまたぐ移動ありの方が、満足度が上昇した人の割合が高い傾向にあるとともに、低下した人の割合も高くなる。

図表 1-2-8 居住地の変化と生活満足度の増減割合

(1) 男性



(2) 女性



2. 5年前の回顧満足度と5年後の予想満足度の特徴

前項までは、第1回調査にも回答しているパネルデータに限定した分析を行ったが、現在を起点とし、5年前を回顧した生活満足度と、5年後を予想した生活満足度について本調査では新たに尋ねていることから、本項では、その動向について確認する。

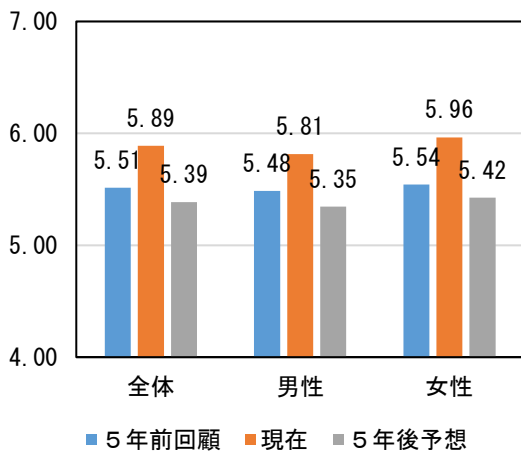
(過去、現在、未来の満足度)

5年前回顧満足度と、現在満足度、5年後予想満足度を比較すると、現在満足度が数値として一番高く、5年前回顧満足度、5年後予想満足度の順で続いていく。また、若年層のみにおいて、5年前回顧満足度よりも5年後予想満足度の方が、高くなっている。

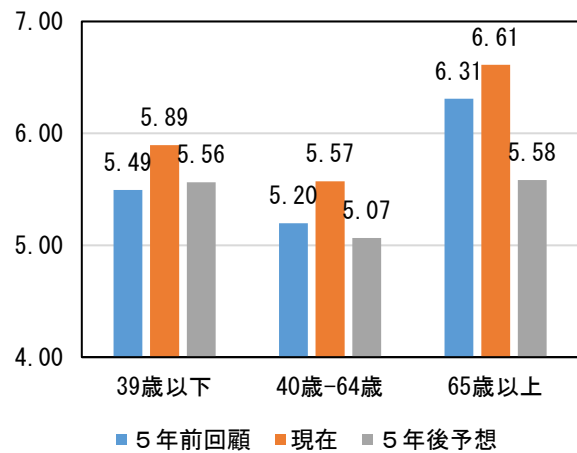
なお、本調査と同様に現在を起点に5年後を予想する満足度を質問している調査も存在するが、そうした他の調査では、今回の結果と異なり、若年層では予想満足度の方が現在満足度より高くなっている。今回の調査では、冒頭に現在の生活満足度を尋ね、各分野別の満足度や将来不安等について質問した後に、5年前回顧満足度及び5年後予想満足度を尋ねており、そうした質問構成が回答結果に影響を与えた可能性があることに留意が必要である。

図表 1-2-9 5年前回顧満足度、現在満足度、5年後予想満足度

(1) 男女別



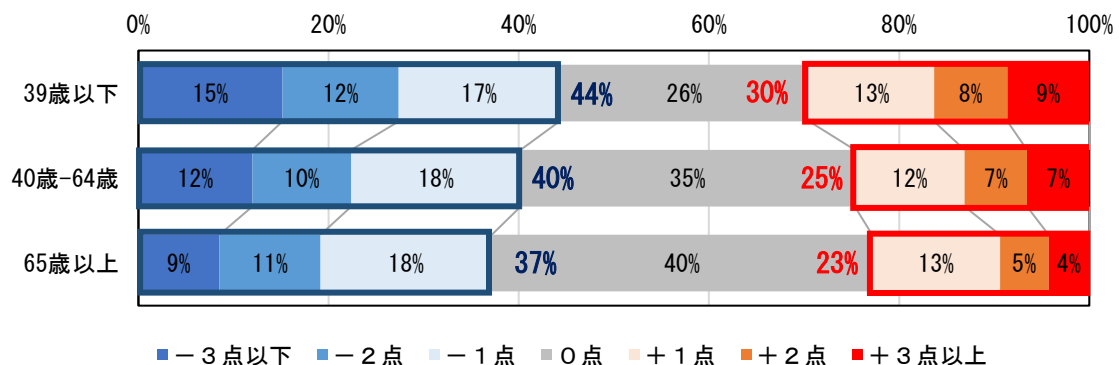
(2) 年齢階層別



(5年前回顧満足度と現在満足度の増減割合)

5年前回顧満足度と現在満足度の増減割合を確認する。年齢階層別にみると、若年層において、現在満足度の方が高い割合、低い割合ともが一番大きい⁹。

図表 1-2-10 5年前回顧満足度と現在満足度の増減割合 (年齢階層別)

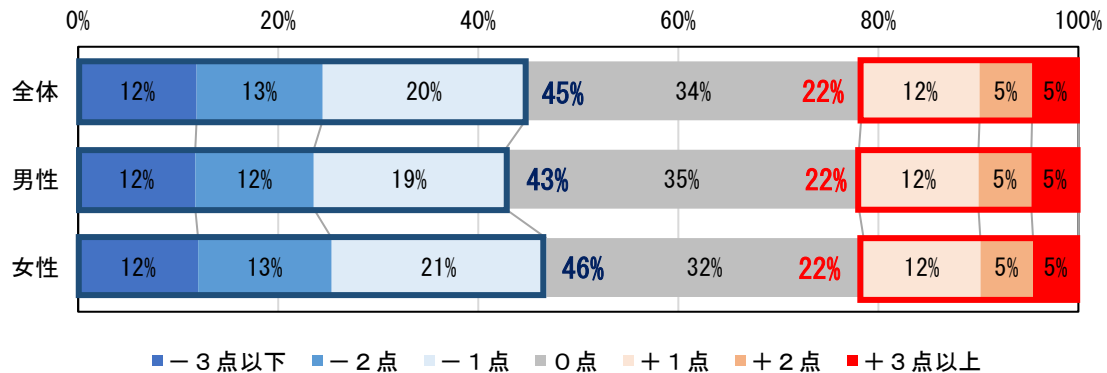


(現在満足度と5年後予想満足度の増減割合)

現在満足度と5年後予想満足度の増減割合を確認する。男女別にみても、あまり特徴的な差異はないが、5年後予想満足度が現在の生活満足度よりも上昇すると回答した人は20%に満たないのに対し、おおよそ半数の人が、現在よりも低下すると回答していることから、将来への不安の高さがうかがえる。

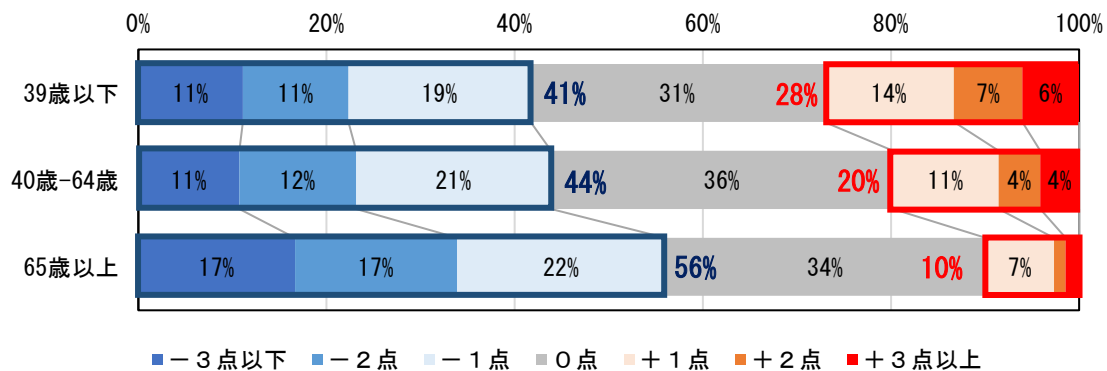
⁹ なお、起点を現在満足度としているため、現在満足度の方が5年前回顧満足度よりも高ければ負の値、現在満足度の方が低ければ正の値となる。

図表 1-2-11 現在満足度と5年後予想満足度の増減割合（男女別）



また、年齢階層別にみても、年齢階層が若くなるにしたがって、5年後予想満足度が高くなるという回答割合が増加する傾向にある。また、高齢層は半数以上の人現在より低下すると回答しているのに加え、上昇すると回答した人の割合も突出して低い結果となっている。

図表 1-2-12 現在満足度と5年後予想満足度の増減割合（年齢階層別）

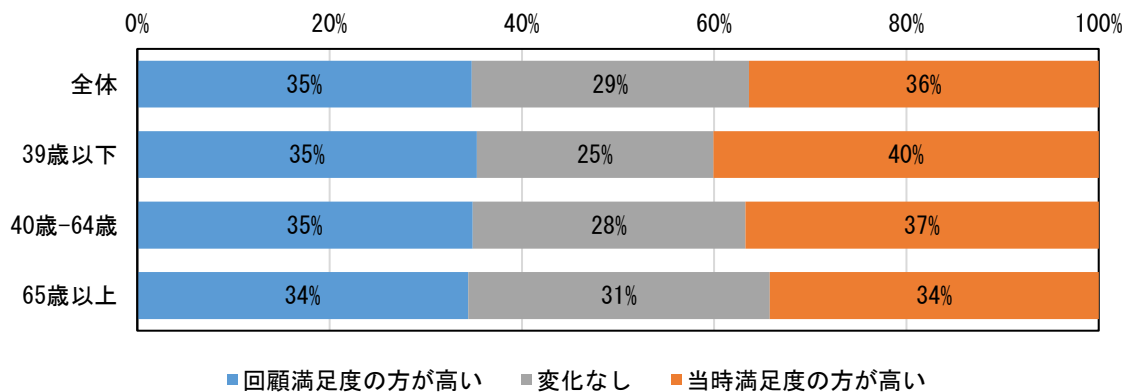


（5年前を回顧した満足度と当時の回答結果の比較）

ここまでは、今回の調査結果のみを用いていたが、以降は前項と同様のパネルデータに限定した分析を行っていく。

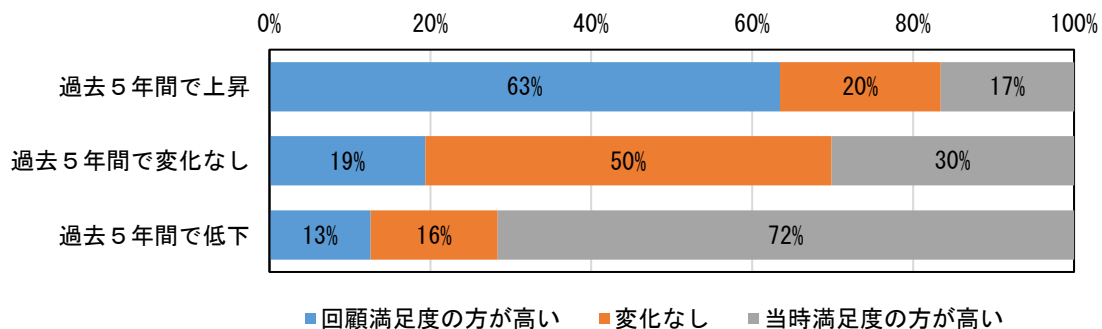
パネルデータは5年前の回答であるため、時点としては、5年前回顧満足度と一致することになる。まずは、こうしたデータの特徴に着目して、今回の調査における5年前回顧満足度と実際に5年前に回答した満足度を比較していく。年齢階層別にみてもあまり大きな差は見られないが、若いほど回顧満足度の方が低い人の割合が多くなる傾向がある。

図表 1-2-13 5年前に回答した生活満足度と5年前回顧満足度の関係
(年齢階層別)



次に、5年前回顧満足度と5年前当時満足度の関係性を過去5年間での実際の満足度の変化で場合分けを行い、比較していく。この5年で満足度が上昇していると、5年前の満足度は、当時満足度よりも回顧満足度の方が高くなる傾向にある。他方、低下していると、当時満足度よりも回顧満足度の方が低くなることが読み取れる。5年間での満足度の変化が回顧した時の満足度へ一定の影響を与えていると考えられる。

図表 1-2-14 過去5年間の満足度変化からみる
5年前当時満足度と5年前回顧満足度の傾向



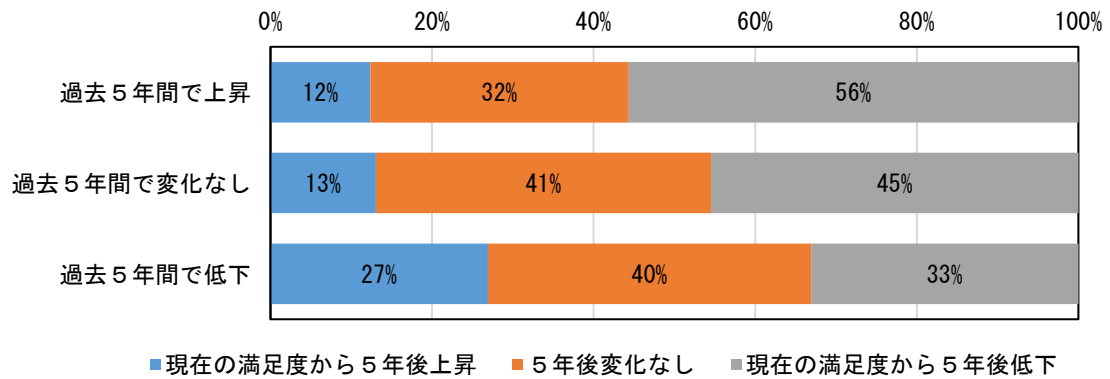
(5年間の満足度変化と、今後の満足度の見通しの傾向)

最後に、過去5年間の満足度の実際の変化と将来5年後の予想満足度の変動の関係を見ていく。具体的には、5年前に実際に回答した満足度と、現在の満足度を比較し、上昇・低下などの傾向に応じて、5年後の生活満足度の見通しがどのように変動するかについて分析する。

5年後の満足度が低下すると予想するのは、過去5年間で満足度が上昇した場合が最も多く、半数を超えている。一方、5年後は上昇すると予想するのは、過去5年間で満足度が低下した場合が最も多くなっている。過去5年間の変動を踏まえ、

その延長線上で上昇・低下を想定するのではなく、反動的な見通しを想定している人が一定数存在すると考えられる。

図表 1-2-15 過去5年間の満足度変化が5年後予想満足度に与える影響



第3節 働き方（転職・起業・副業・就業意向）と満足度

近年、正社員における転職率は高水準で推移しており、副業率についても増加傾向にあるなど、働き方は多様化している。一方、急速な少子高齢化の進行により、労働供給の減少・人手不足が予見されており、労働生産性の向上や労働参加の拡大が課題となっている。

今回の調査では、新たに働き方に関連した設問を追加したところであり、具体的には転職や起業に関連したものに加え、何歳まで働きたいかという就業意向について質問している。こうした項目を活用し、本節では、生産年齢人口である若年層・ミドル層の就業者を主な対象とし、転職・起業・副業・就業意向の有無など働き方や労働への意識が満足度へどのように影響しているかを中心に分析する。

1. 転職の意向と満足度の関係

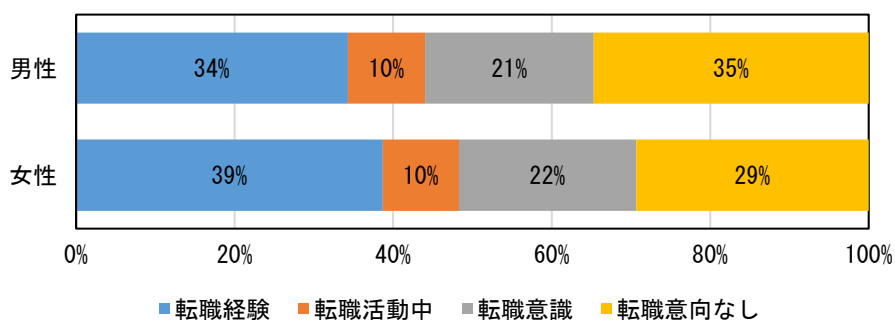
（転職の意向）

はじめに、転職意向の有無・転職活動の状況¹⁰について確認していく。男女別にその回答割合をみると、男性よりも女性の方が「転職経験」の割合が高い。一方で、「転職意向なし」と回答した割合は女性よりも男性の方が高くなっている。また、「転職活動中」「転職意識」では、男女間の違いはほとんどみられない。

若年層とミドル層の年齢階層別にみると、ミドル層の方が「転職経験」の割合が高く、若年層では「転職活動中」「転職意識」と回答した割合が高くなっている。

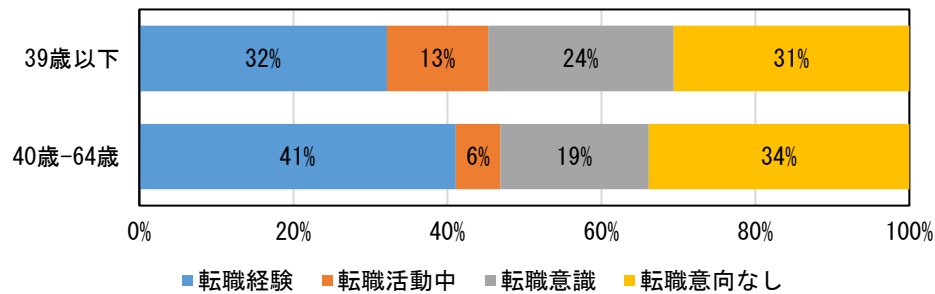
図表1-3-1 転職の意向（割合）

（1）男女別



¹⁰ 以下では、転職意向の有無・転職活動の状況について、「転職したことがある（転職が既に決まっている場合を含む）」を選択した人を「転職経験」、「転職に向けた情報収集や応募などを行っていた（行っている）」が、転職していないを「転職活動中」、「転職を意識したことはあるが、特に転職に向けた活動は行っていない」を「転職意識」、「転職を意識したことはない」を「転職意向なし」としている。

(2) 年齢階層別



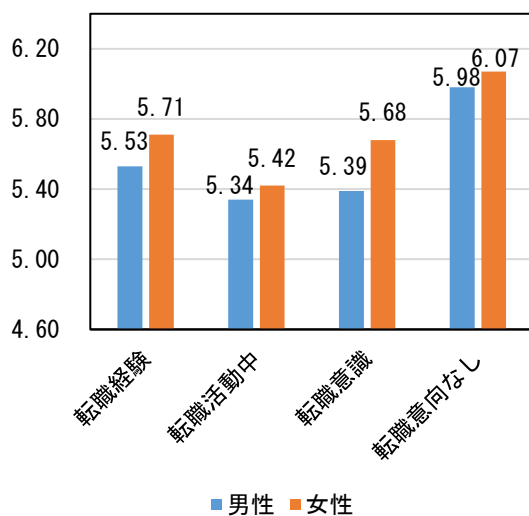
(転職の意向と生活満足度)

転職の意向と生活満足度の関係について男女別にみると、「転職意向なし」の満足度が最も高くなっている。

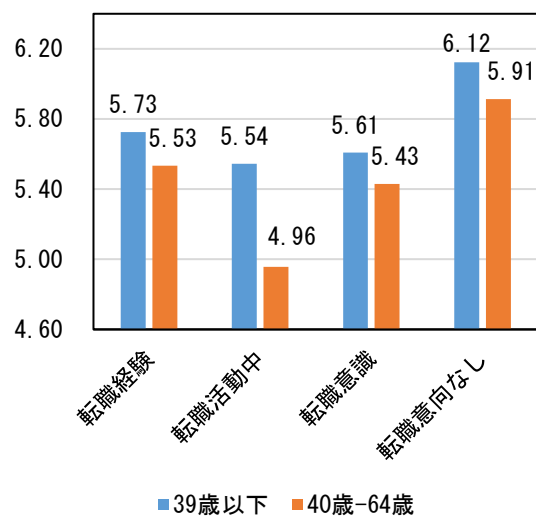
年齢階層別にみると、若年層・ミドル層共に「転職意向なし」が最も高くなっている。若年層では「転職活動中」と「転職意識」が同程度の水準となっている一方で、ミドル層では「転職活動中」が顕著に低くなっている。

図表 1-3-2 転職の意向と生活満足度

(1) 男女別



(2) 年齢階層別



(転職の意向と「雇用環境と賃金」満足度)

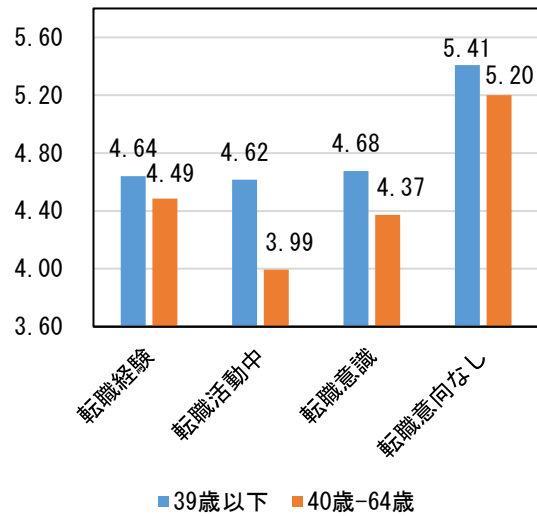
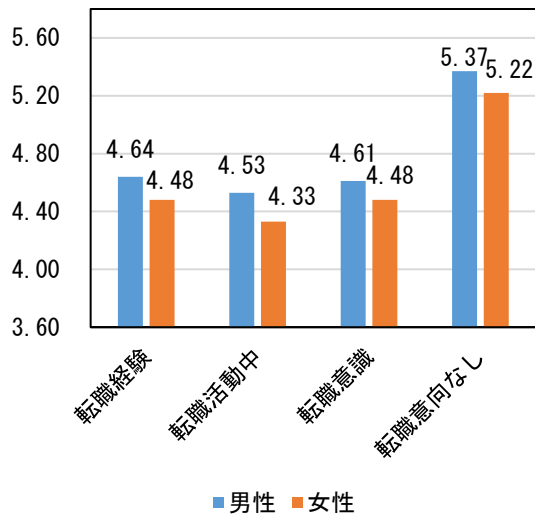
転職の意向と「雇用環境と賃金」満足度の関係について男女別にみると、生活満足度の傾向と同様に、共に「転職意向なし」の満足度が最も高くなっている。

年齢階層別にみると、若年層・ミドル層共に「転職意向なし」が最も高くなっている。若年層では「転職経験」「転職活動中」「転職意識」が同程度であるのに対して、ミドル層では「転職活動中」が顕著に低くなっている。

図表 1-3-3 転職の意向と「雇用環境と賃金」満足度

(1) 男女別

(2) 年齢階層別



(転職の意向と「仕事と生活 (WLB)」満足度)

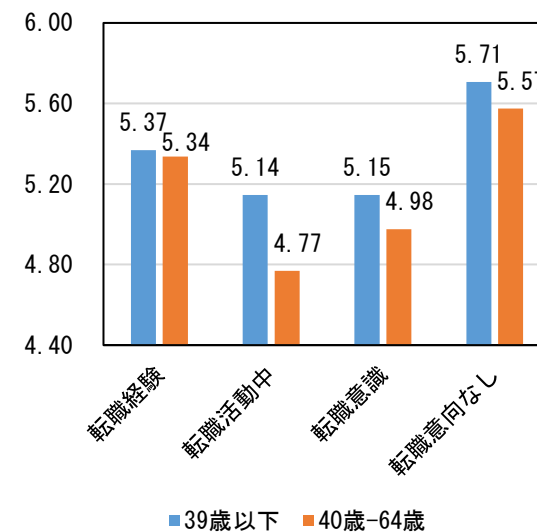
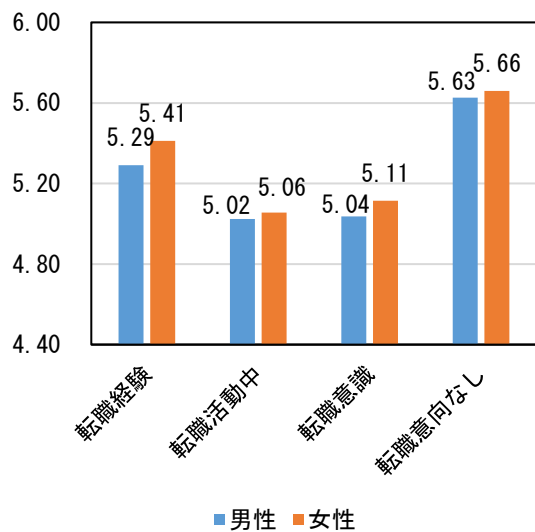
転職の意向と「仕事と生活 (WLB)」満足度の関係について男女別にみると、共に「転職意向なし」の満足度が最も高くなっている。

年齢階層別にみると、若年層・ミドル層共に「転職意向なし」が最も高くなっている。若年層では「転職活動中」「転職意識」が同程度であるのに対して、ミドル層では「転職活動中」が最も低くなっている。

図表 1-3-4 転職の意向と「仕事と生活 (WLB)」満足度

(1) 男女別

(2) 年齢階層別



2. 起業の意向と満足度の関係

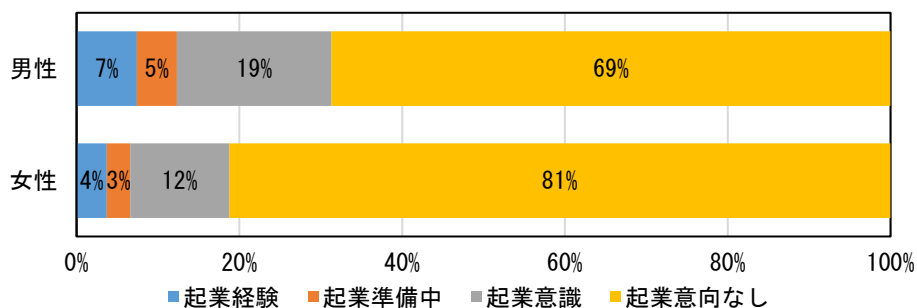
(起業の意向)

次に、起業意向の有無・起業準備活動の状況¹¹をみていく。男女別の回答割合では、女性よりも男性の方が「起業経験」「起業準備中」「起業意識」の割合が高く、起業への意向が高い傾向が見られる。

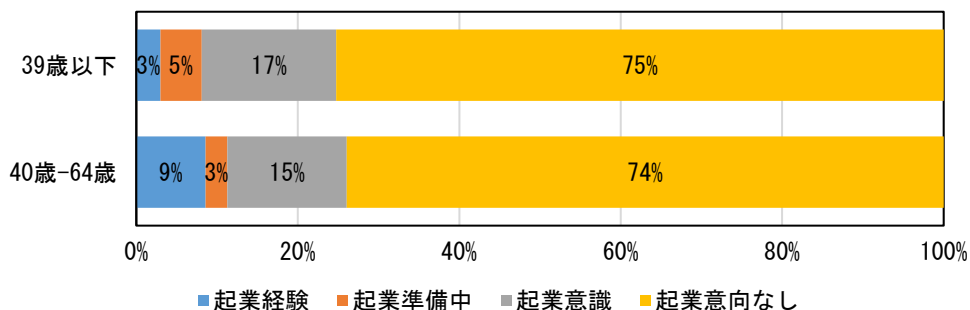
年齢階層別にみると、ミドル層の方が「起業経験」が多いが、それ以外の項目ではほとんど違いはみられない。

図表 1-3-5 起業の意向 (割合)

(1) 男女別



(2) 年齢階層別



(起業の意向と生活満足度)

起業の意向と生活満足度の関係について男女別にみると、男性では「起業準備中」、女性では「起業経験」の満足度が最も高くなっている。また、女性では「起業経験」の方が「起業意識」より高いが、男性ではわずかながら「起業意識」の方が高い傾向にある。

年齢階層別にみると、若年層は「起業経験」の満足度が最も高くなっているのに

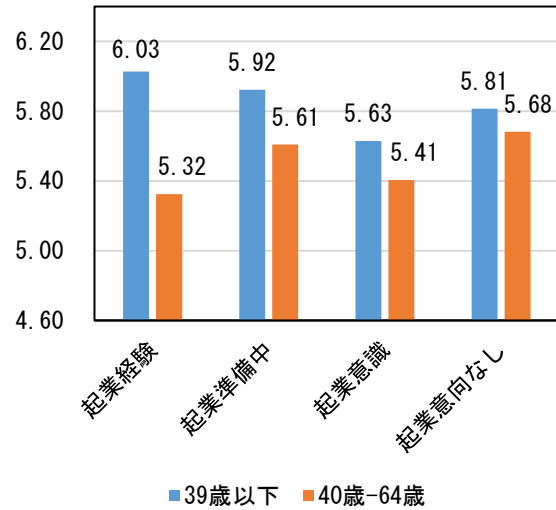
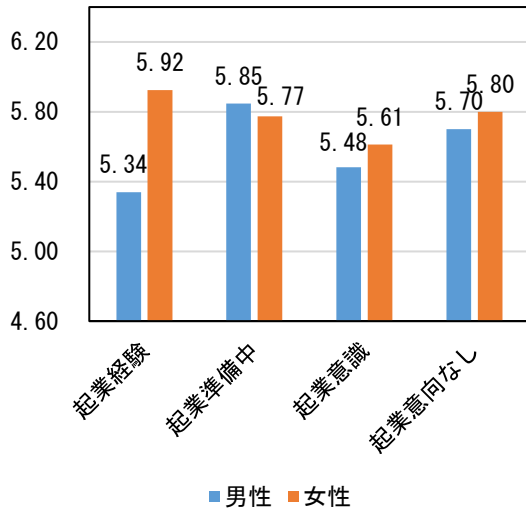
¹¹ 以下では、起業意向の有無・起業準備活動の状況について、「起業したことがある」を選択した人を「起業経験」、「起業に向けた準備（機材や場所を探す、事業計画を練る）を行っていた（行っている）」が、起業していないを「起業準備中」、「起業を意識したことはあるが、特に起業に向けた準備は行っていない」を「起業意識」、「起業を意識したことはない」を「起業意向なし」としている。

対して、ミドル層は「起業意向なし」が高い傾向にある。「起業経験」を選択した人に着目すると、若年層とミドル層での満足度に顕著な差がみられる。

図表 1-3-6 起業の意向と生活満足度

(1) 男女別

(2) 年齢階層別



(起業の意向と「雇用環境と賃金」満足度)

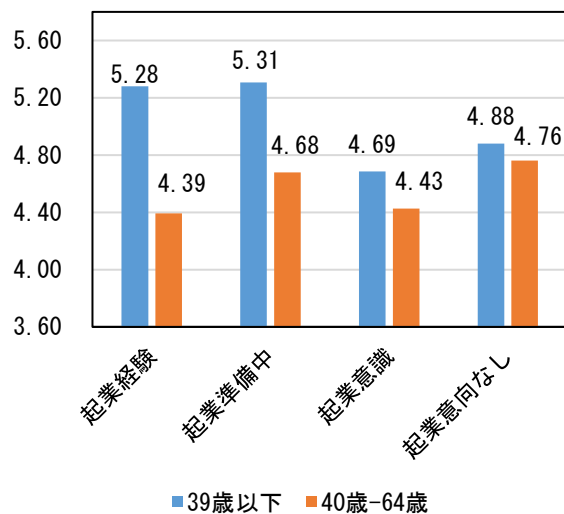
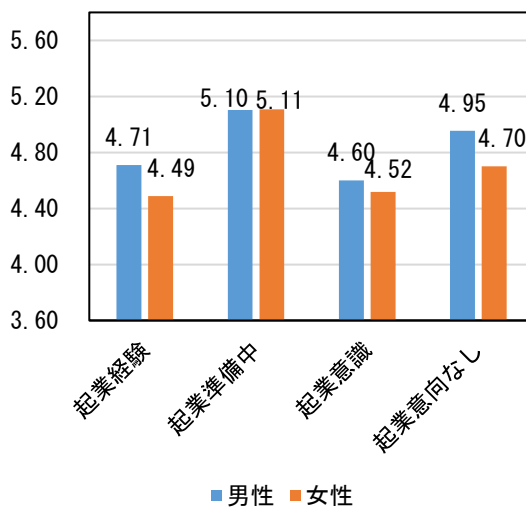
起業の意向と「雇用環境と賃金」満足度の関係について男女別にみると、生活満足度とは異なり、共に「起業準備中」が最も高くなっている。

年齢階層別にみると、若年層では「起業経験」「起業準備中」の満足度が顕著に高くなっているのに対し、ミドル層ではそうした傾向はみられない。

図表 1-3-7 起業の意向と「雇用環境と賃金」満足度

(1) 男女別

(2) 年齢階層別



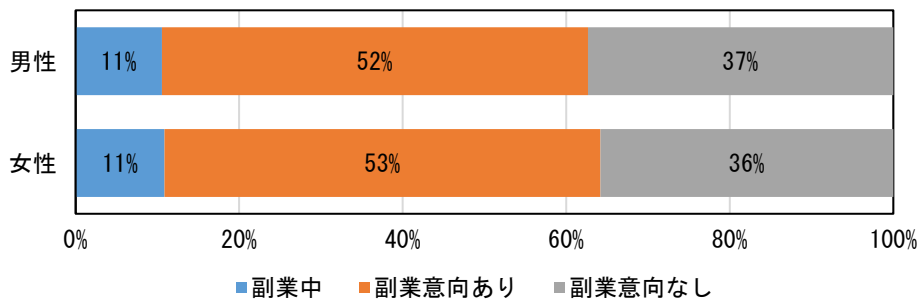
3. 副業の意向と満足度の関係

(副業の意向)

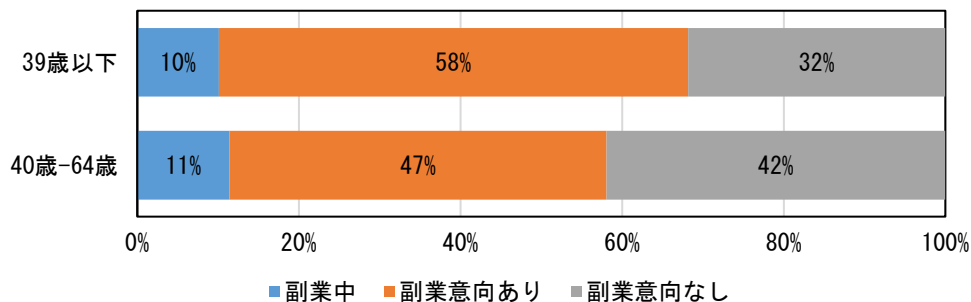
副業意向の有無・副業の状況¹²について、男女間の違いはほとんどみられない。年齢階層別では、ミドル層と比較して若年層の方が副業の意向が高い傾向がある。

図表 1-3-8 副業の意向 (割合)

(1) 男女別



(2) 年齢階層別



(副業の意向と生活満足度)

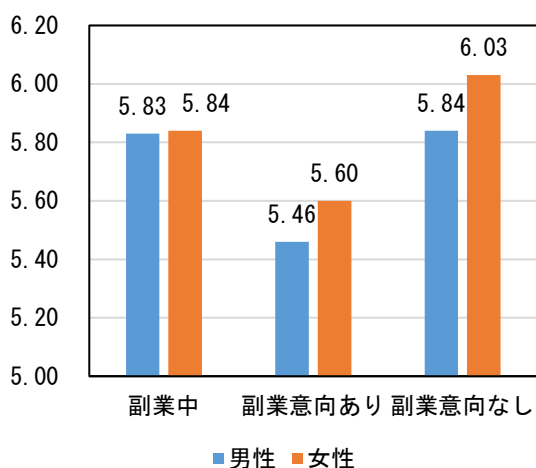
副業の意向と生活満足度の関係について男女別にみると、「副業中」では男女の満足度の水準に差はないが、それ以外では女性の方が高い傾向にある。

年齢階層別にみると、若年層・ミドル層共に「副業意向あり」の満足度が最も低くなっているのに加え、「副業中」「副業意向なし」と比較しての落ち込みはミドル層の方が大きくなっている。

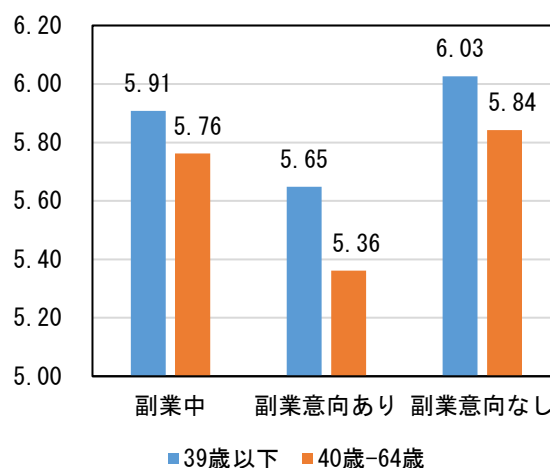
¹² 以下では、副業意向の有無・副業の状況について、「副業を持っている」を選択した人を「副業中」、「副業を持ちたいが、持っていない」を「副業意向あり」、「副業を持ちたいとは思わない」を「副業意向なし」としている。

図表 1-3-9 副業の意向と生活満足度

(1) 男女別



(2) 年齢階層別



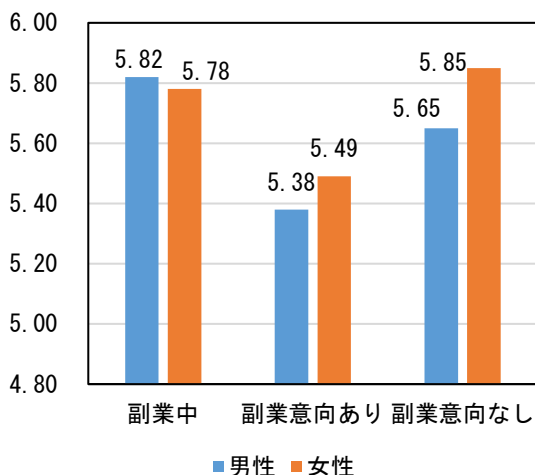
(副業の意向と「生活の楽しさ・面白さ」満足度)

副業の意向と「生活の楽しさ・面白さ」満足度の関係について男女別にみると、男性では「副業中」の満足度が最も高いのに対し、女性では「副業意向なし」が高くなっている。また男女共に「副業意向あり」が最も低い。

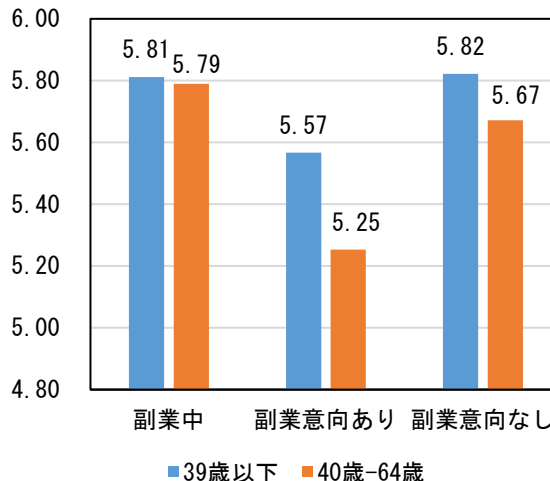
年齢階層別にみると、「副業中」の生活の楽しさ・面白さ満足度に大きな違いはみられないが、「副業意向あり」ではミドル層が顕著に低くなっている。

図表 1-3-10 副業の意向と「生活の楽しさ・面白さ」満足度

(1) 男女別



(2) 年齢階層別



ここまで、転職・起業・副業と満足度の関係を見てきたが、それぞれに傾向の違いがみられた。主な傾向としては、転職では、男女別・年齢階層別に限らず

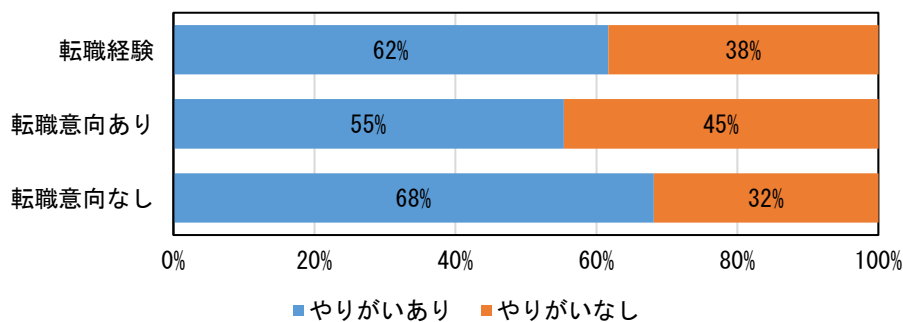
「転職意向なし」の満足度が最も高いことから、賃金環境含め現状に満足していない人が転職を意識する傾向にあることが伺える。一方で、起業については、若年層における「起業経験」「起業準備中」の満足度が高い傾向にあることから、起業に向けた動きやその経験が満足度にプラスの影響を与えていることが示唆される。副業では、「副業中」「副業意向なし」の満足度が高く、その水準に大きな差はないことから、副業の有無というよりも自らが望む働き方が叶っているかが重視されている可能性がある。

4. 転職・起業・副業と仕事のやりがいの関係

（転職と仕事のやりがい）

前項までは、転職・起業・副業と各種満足度の関係を確認したが、本項ではそれらと仕事へのやりがいの関係を見ていく。まず、転職については、「転職意向なし」の約7割がやりがいを感じているのに対し、「転職意向あり」では約5割と水準に差がある¹³。

図表1-3-11 転職と仕事のやりがい



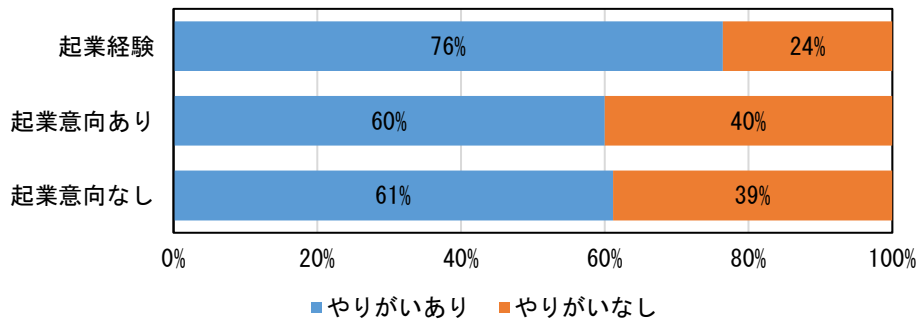
（起業と仕事のやりがい）

次に、起業との関係を見ると、「起業意向あり」「起業意向なし」共に約6割程度がやりがいを感じているのに対し、「起業経験」では約8割と高い傾向にある¹⁴。

¹³ ここでは、「転職に向けた情報収集や応募などを行っていた（行っている）が、転職していない」「転職を意識したことはあるが、特に転職に向けた活動は行っていない」を「転職意向あり」としている。

¹⁴ ここでは、「起業に向けた準備（機材や場所を探す、事業計画を練る）を行っていた（行っている）が、起業していない」「起業を意識したことはあるが、特に起業に向けた準備は行っていない」を「起業意向あり」としている。

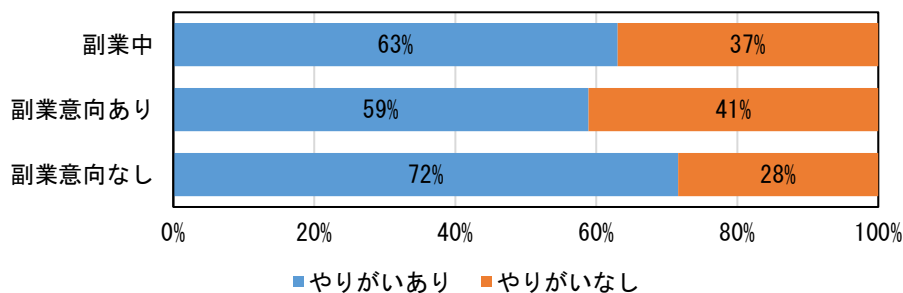
図表 1-3-12 起業と仕事のやりがい



(副業と仕事のやりがい)

副業との関係を見ると、「副業意向なし」の約7割がやりがいを感じており、「副業中」、「副業意向あり」の順に、やりがいありの割合が減少しており、転職と似たような傾向となっている。

図表 1-3-13 副業と仕事のやりがい



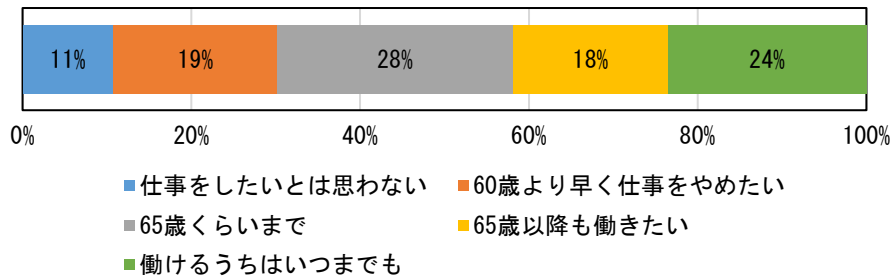
5. 生涯を通じた就業意向と満足度の関係

(生涯を通じた就業意向)

最後に、生涯を通じた就業意向と満足度の関係を分析していく。まず、60歳未満の就業意向¹⁵についてみると、「65歳くらいまで」が最も多くなっている。一方で、「65歳以降も働きたい」と「働けるうちはいつまでも」の合計で約4割程度となっており、高齢者となっても働き続けたいと考えている層が一定数いることがわかる。

¹⁵ 以下では、「あなたは、何歳ごろまで収入を伴う仕事をしたいですか。または、仕事をしなかったですか。」という質問に対し、「70歳くらいまで」「75歳くらいまで」「80歳くらいまで」を選択した人を「65歳以降も働きたい」としている。

図表 1-3-14 生涯を通じた就業意向（60歳未満）

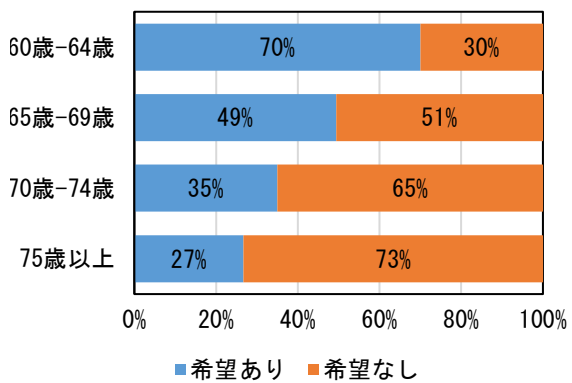
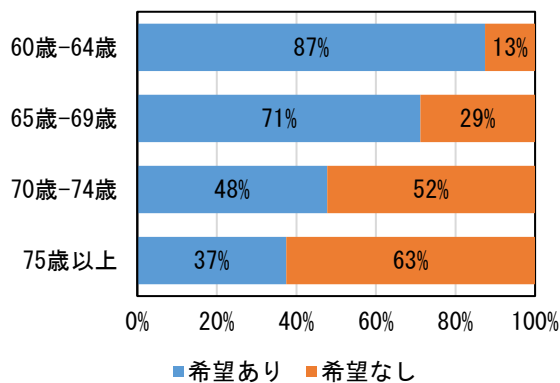


次に、60歳以上の就業意向についてみていく。質問の性質上、60歳以上については、回答者の年齢を加味することで、就業を希望しているかどうかを判別可能となる¹⁶。男女共に、年齢を重ねる程に就業を希望する割合は低くなるものの、男性の70歳-74歳、女性の65歳-69歳でも約5割となっているなど、一定の水準を維持していることがわかる。

図表 1-3-15 60歳以上の就業希望割合

(1) 男性

(2) 女性



(就業希望の実現状況)

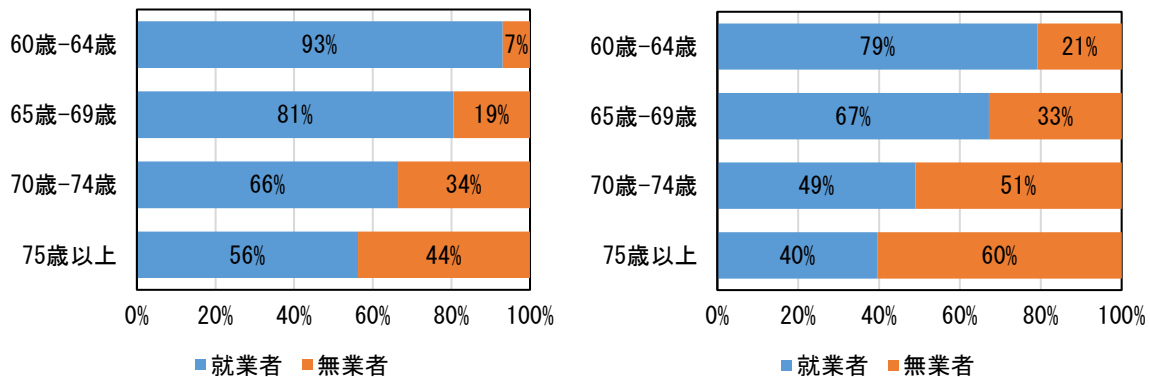
ここからは、上記を踏まえ、60歳以上で就業を希望している方に着目して分析をしていく。就業希望の60歳以上が、その希望が叶っているかをみると、70歳以上の女性を除く概ね6割以上が就業しており、その半数以上が就業希望を実現していることがわかる。

¹⁶ 例えば、66歳の回答者が「65歳くらいまで」を選択した場合は、現在就労を希望していないことになり、「70歳くらいまで」を選択した場合は、就労を希望していることになる。

図表 1-3-16 就業希望者の就業状況（60歳以上）

(1) 男性

(2) 女性

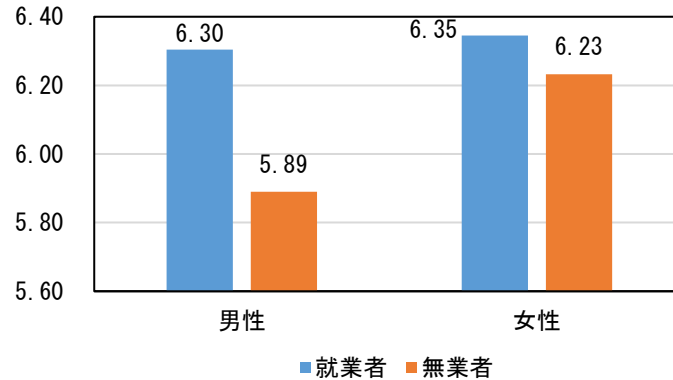


(就業希望と生活満足度)

60歳以上の就業希望者の生活満足度の関係についてみると、就業者では男女間の違いはほとんどみられない。無業者では女性よりも男性の方が低くなっている。

男女別でみると、女性よりも男性の方が就業者・無業者間で顕著な差がみられる。

図表 1-3-17 60歳以上の就業希望者の生活満足度（就業状況別）

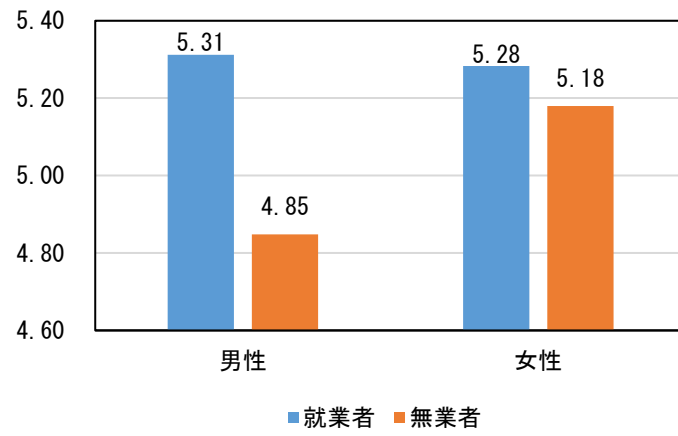


(就業希望と「家計と資産」満足度)

60歳以上の就業希望者の「家計と資産」満足度の関係についてみると、就業者では男女間の違いはほとんどみられない。無業者では女性よりも男性の方が低くなっている。

男女別でみると、生活満足度と同様に、女性よりも男性の方が就業者・無業者間で顕著な差がみられる。

図表 1-3-18 60歳以上の就業希望者の「家計と資産」満足度
(就業状況別)



第4節 重視事項と評価事項の関係

「満足度・生活の質に関する調査」では、13分野のうち、生活満足度を判断する際に重視した事項を初回調査より継続して質問している。一方、これだけでは、その事項が満足度へプラスの影響を与えているのか、マイナスの影響を与えているのかが判別することが難しい。こうした点を踏まえ、今回の調査では、高く評価している事項と低く評価している事項についても回答を求めている。

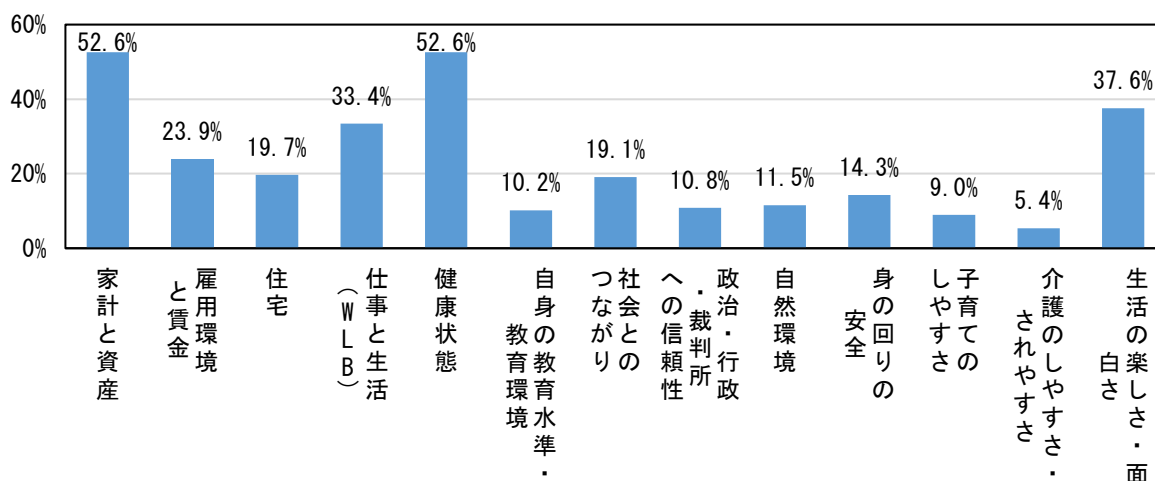
本節では、13分野のうち、生活満足度を判断する際に重視した事項の第1位から第3位を「重視事項」、生活するにあたり高く評価している事項としての上位3つを「高評価事項」、低く評価している事項としての下位3つを「低評価事項」として分析を行う。

1. 重視事項、高評価事項、低評価事項に関する現況

（重視事項の選択者の割合）

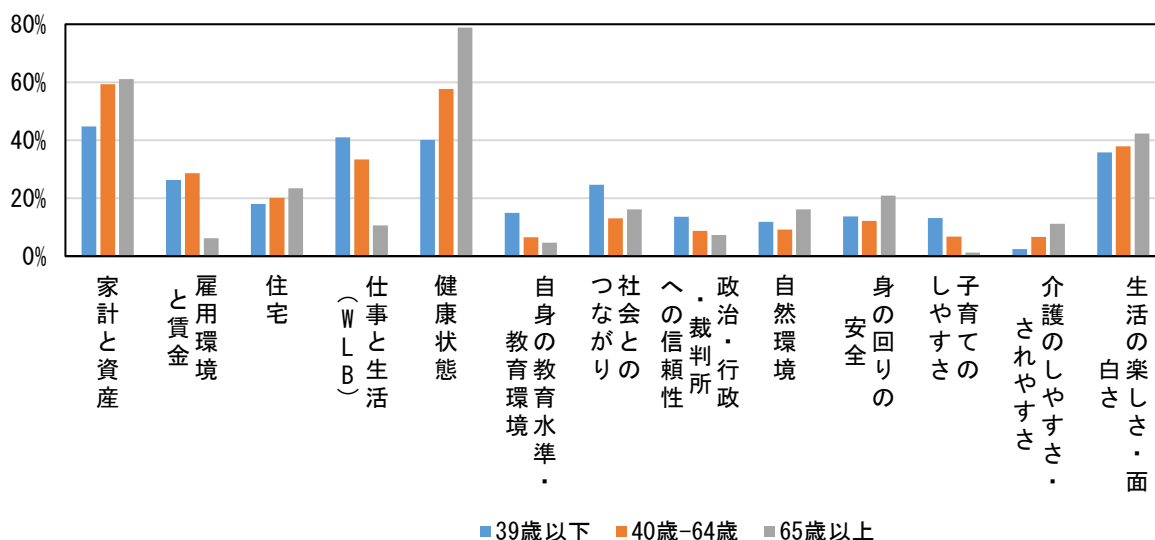
まず、重視事項の選択者の割合を、各分野別に確認する。「家計と資産」「健康状態」「生活の楽しさ・面白さ」「仕事と生活（WLB）」などが多く選択されており、特に「家計と資産」「健康状態」は全体の5割以上が重視している。

図表1-4-1 重視事項の選択者の割合



続いて、重視事項の選択者の割合について、年齢階層による傾向の違いをみていく。「健康状態」は年齢階層が高くなるほど重視する割合が高くなっており、特に高齢層では約8割が重視している。「家計と資産」はミドル層・高齢層は6割程度が重視しているのに対し、若年層は4割程度と一定の差がある。一方で、「仕事と生活（WLB）」「子育てのしやすさ」は年齢階層が低くなるほど重視する割合が高くなっていく。

図表 1-4-2 重視事項の選択者の割合（年齢階層別）

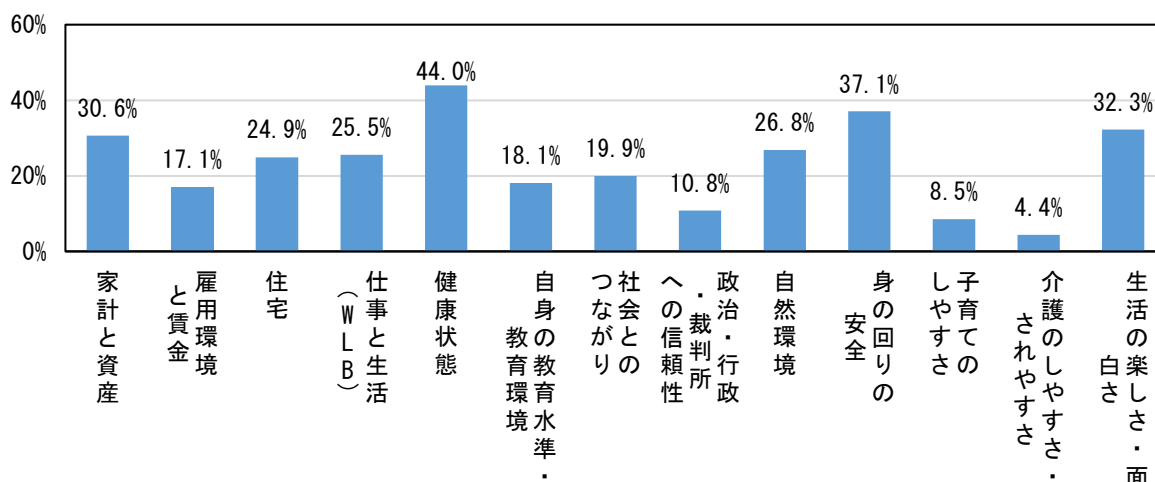


（高評価事項の選択者の割合）

高評価事項の選択者の割合を、各分野別に確認すると、最も評価されている分野は「健康状態」、次いで「身の周りの安全」となっている。

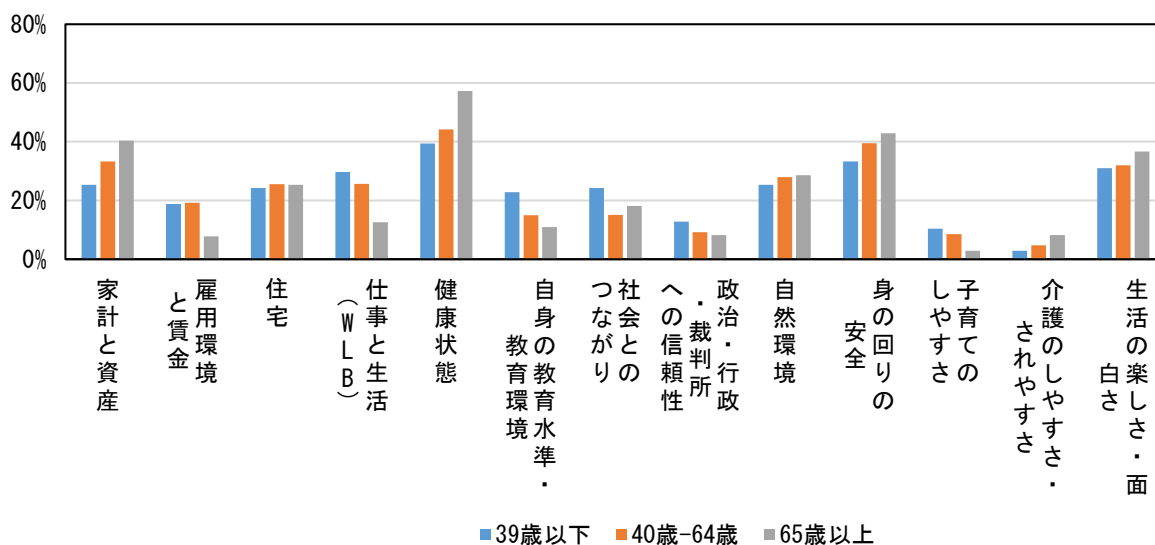
一方で、「家計と資産」は重視の割合が50%以上である一方で、高評価の割合は約30%と、重視の割合と比較して高評価の割合に大きく差がある。また、「自然環境」「身の周りの安全」については、いずれも重視事項に比べて2倍以上の割合で選択されていることがわかる。

図表 1-4-3 高評価事項の選択者の割合



年齢階層別に確認すると、「健康状態」「身の周りの安全」「家計と資産」などは年齢が高いほど割合が高くなっている。一方で、「社会とのつながり」は若年層が一番高く、ミドル層が最も低くなっている。

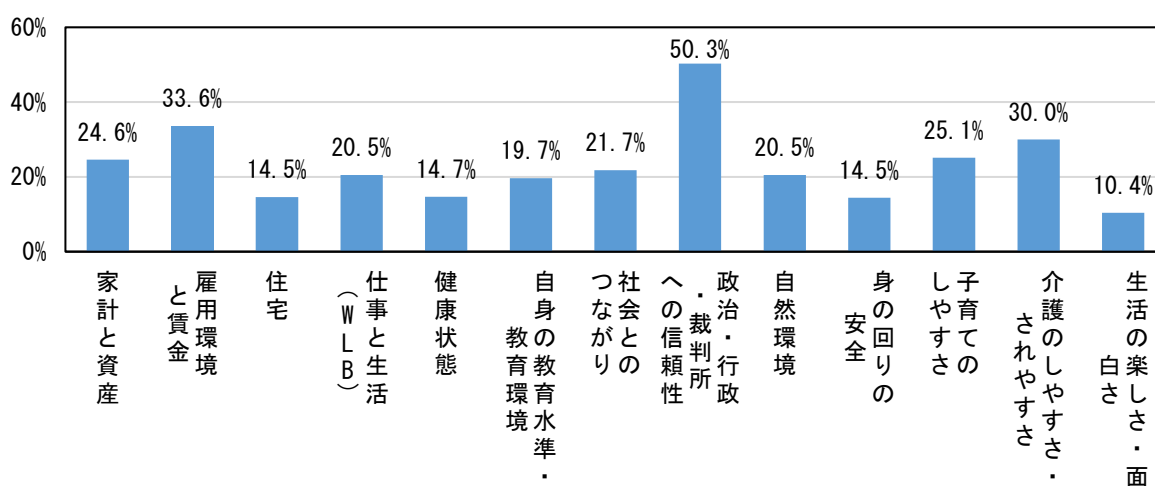
図表 1-4-4 高評価事項の選択者の割合（年齢階層別）



（低評価事項の選択者の割合）

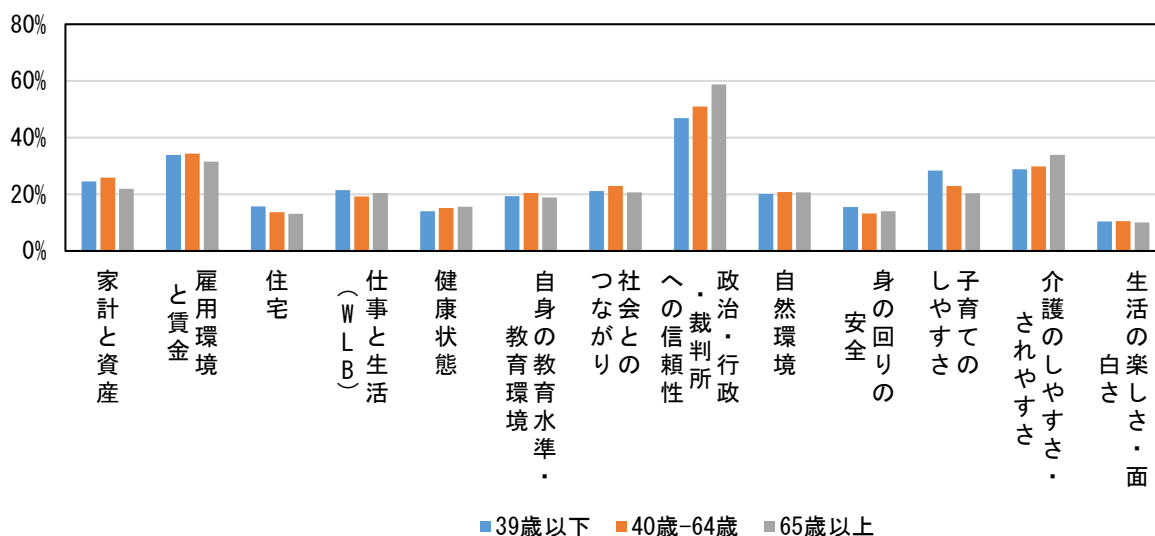
次に、低評価事項については、「政治・行政・裁判所への信頼性」が最も多く選択されている。高評価事項と異なり、重視事項で割合が高い分野は低評価事項でも高いといった傾向はみられない。例えば、「健康状態」の割合は、重視事項や高評価事項と比較して低く、「子育てのしやすさ」の割合は、重視事項や高評価事項と比較して高くなっている。

図表 1-4-5 低評価事項の選択者の割合



低評価事項の選択者の割合を年齢階層別に確認すると、重視事項や高評価事項ほど年齢階層による差は大きくないが、「子育てのしやすさ」については年齢階層が下がるほど低評価の割合が高く、年齢階層による差が大きい。

図表 1-4-6 低評価事項の選択者の割合（年齢階層別）



2. 重視事項と評価事項の関係

回答者によっては、重視事項と高（低）評価事項で選択する分野が重複することになるが、そうした重視事項と評価事項の関係について分野毎にまとめたものが図表 1-4-7 である。以下では、それぞれの特徴毎に整理していく¹⁷。

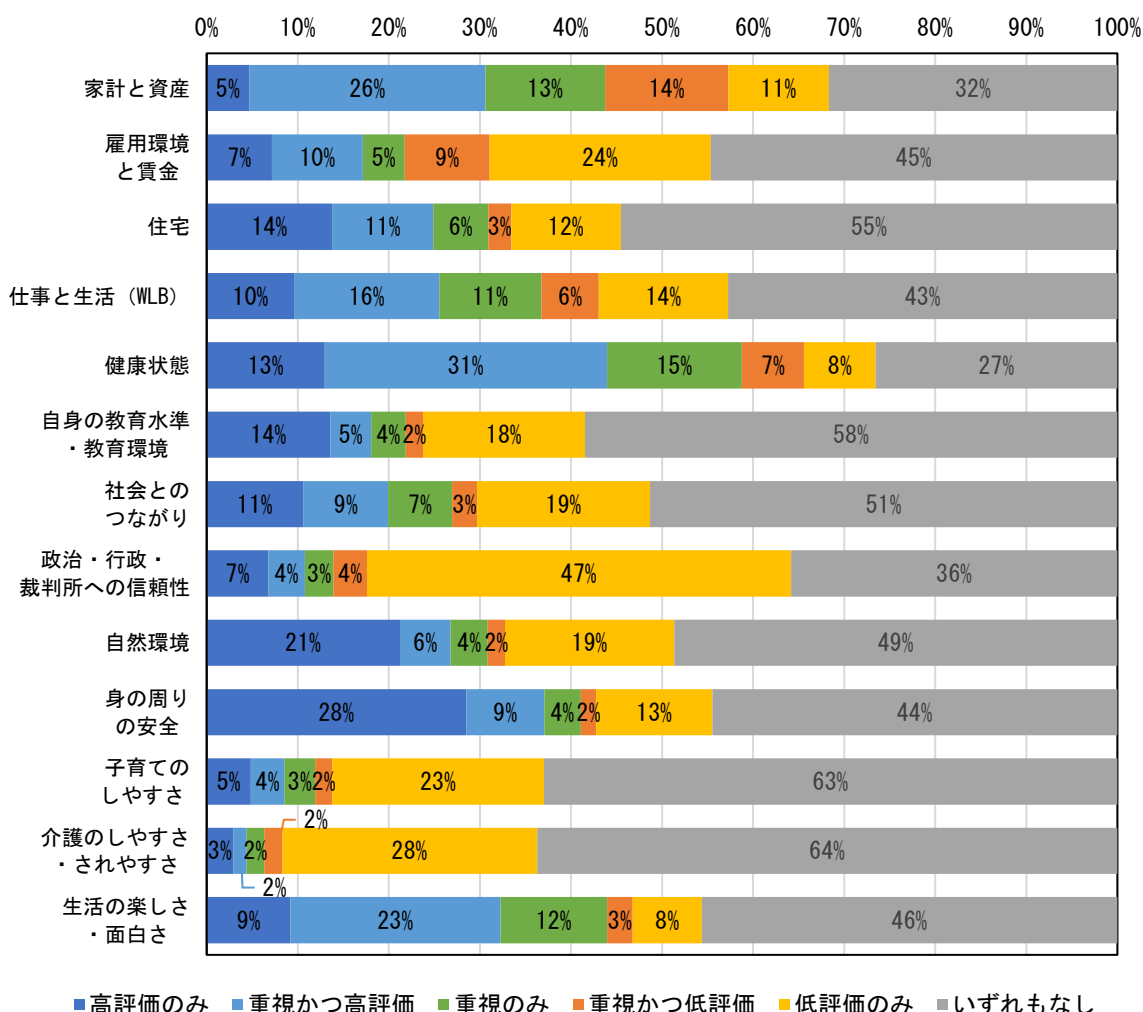
まず、最も生活満足度にプラスの影響を与えることが推察される、重視かつ高評価に着目すると、「家計と資産」「健康状態」「生活の楽しさ・面白さ」を選択する人が多くなっている。それぞれ、高評価している人の7～8割程度があわせて重視もしており、両者の関係性が強い分野となっている。一方で、「家計と資産」については、重視かつ低評価の割合が最も多い分野となっており、両極化しているといえる。

次に、重視はしていないものの高評価している分野についてみると、「自然環境」や「身の回りの安全」で選択者が多くなっている。特に「身の回りの安全」については、全体の2番目に高評価の選択者が多い分野であるものの、重視かつ高評価の割合は1割以下となっており、当該分野の高評価が生活満足度を判断する際にあまり重視されていないことが伺える。

一部の分野を除き、重視かつ低評価を選択した割合が最も低くなっているのに対し、重視はしていないものの低く評価している割合は分野によって結果にばらつきがある。「雇用環境と賃金」「自身の教育水準・教育環境」「社会とのつながり」「政治・行政・裁判所への信頼性」「子育てのしやすさ」「介護のしやすさ・されやすさ」では、こうした低評価のみの割合が最も高くなっている（いずれも選択していない人の割合を除く）。

¹⁷ サンプル全体でのグラフであり、各種属性ごとに結果が異なることに留意が必要。例えば、子育て当事者に限定すると、「子育てのしやすさ」を重視かつ高評価している割合は13%となる（全体サンプルだと4%）。

図表 1-4-7 重視事項と評価事項の関係



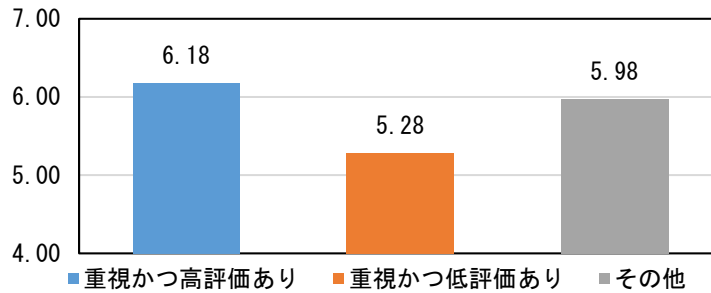
3. 重視事項に係る評価の状況が満足度に及ぼす影響

重視事項と評価事項が生活満足度や分野別満足度にどのような影響を与えているか確認する。

重視かつ高評価としている分野があるグループと、重視かつ低評価としている分野があるグループ、そうした分野がないグループの生活満足度を比較する¹⁸と、重視事項と高評価が一致する場合に満足度が最も高くなっている。加えて、重視事項と低評価が一致する場合の満足度が顕著に低い。

¹⁸ 重視事項と高評価事項が重複している分野が一つでもある場合に、「重視かつ高評価あり」に計上している（「重視かつ低評価あり」も同様）。同一サンプルにおいて、重視かつ高評価の分野と重視かつ低評価の分野の双方が存在する場合があるが、そうしたサンプルは「重視かつ高評価あり」と「重視かつ低評価あり」の両方に重複計上されている。

図表 1-4-8 重視事項と評価事項が一致する場合の生活満足度

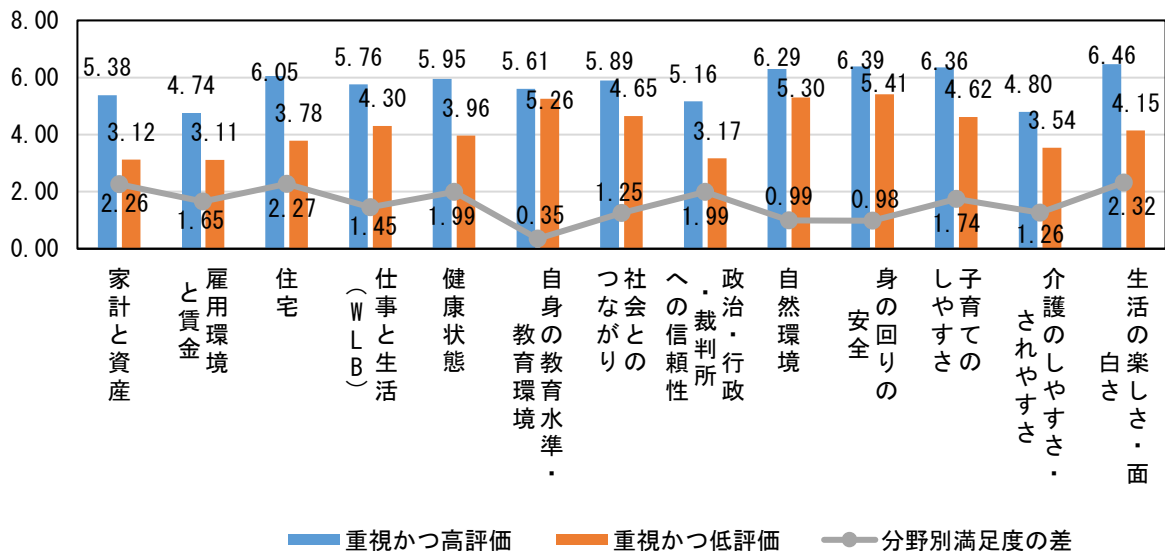


続いて、重視事項と回答し、かつ高評価としているグループと、重視事項と回答し、かつ低評価としているグループの各分野別満足度を確認する。

「重視かつ高評価」のグループの分野別満足度をみると、「生活の楽しさ・面白さ」が最も高く、「雇用環境と賃金」が最も低い。「重視かつ低評価」のグループの分野別満足度をみると、「身の回りの安全」が最も高く、「雇用環境と賃金」が最も低い。

満足度の差が大きい分野は「生活の楽しさ・面白さ」「住宅」「家計と資産」であり、重視事項と評価事項が分野別満足度へ与える影響が大きいことがうかがえる。一方で、差が小さい分野は「自身の教育水準・教育環境」「自然環境」「身の回りの安全」である。

図表 1-4-9 重視事項と評価事項が一致の分野別満足度



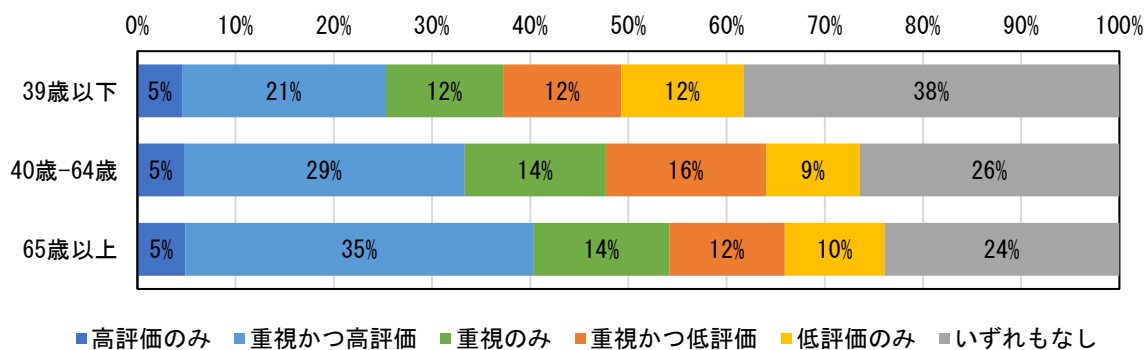
4. 分野別の重視事項と評価事項の関係と分野別満足度

前項までは、13 分野すべてをみてきたが、本項では、そのうち、「家計と資産」「健康状態」「社会とのつながり」に注目して分析していく。

（「家計と資産」の重視事項と評価事項の関係と分野別満足度）

「家計と資産」満足度の重視事項と評価事項の関係を年齢階層別にみると、年齢階層が高くなるにつれて「重視かつ高評価」の割合が高くなってきている。また、「重視かつ低評価」の割合が最も高いのはミドル層である。

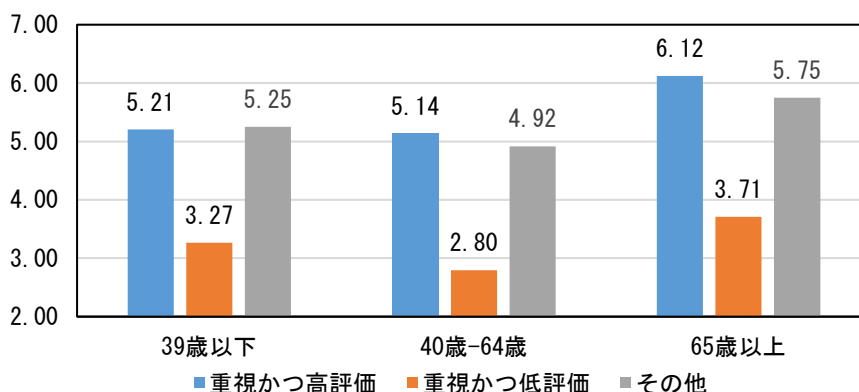
図表 1-4-10 「家計と資産」の年齢階層別割合（重視事項・評価事項）



「重視かつ高評価」のグループと「重視かつ低評価」のグループの年齢階層別「家計と資産」満足度を確認する。「家計と資産」は他分野と比較すると、「重視かつ高評価」と「重視かつ低評価」の分野別満足度の差が大きい分野であるが、年齢階層別にみると、その差は高齢層で最も大きく、若年層で最も小さい。

満足度の水準でみると、どちらのグループも高齢層が一番高い。また、若年層とミドル層の「重視かつ高評価」は同程度となっているが、「重視かつ低評価」で比較すると、ミドル層の方が顕著に低くなっている。若年層に限り、「重視かつ高評価」よりも重視事項と評価事項の一致する分野がないグループの方が高くなっている。

図表 1-4-11 年齢階層別「家計と資産」満足度（重視事項・評価事項）

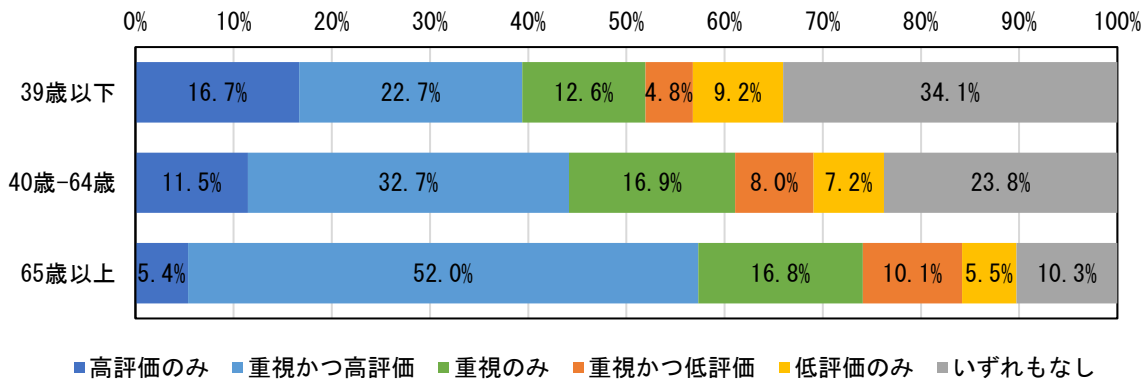


（「健康状態」の重視事項と評価事項の関係と分野別満足度）

次に、「健康状態」の重視事項と評価事項の関係を年齢階層別にみると、年齢階層が高くなるにつれて「重視かつ高評価」の割合が高く、「高評価のみ」の割合が低く

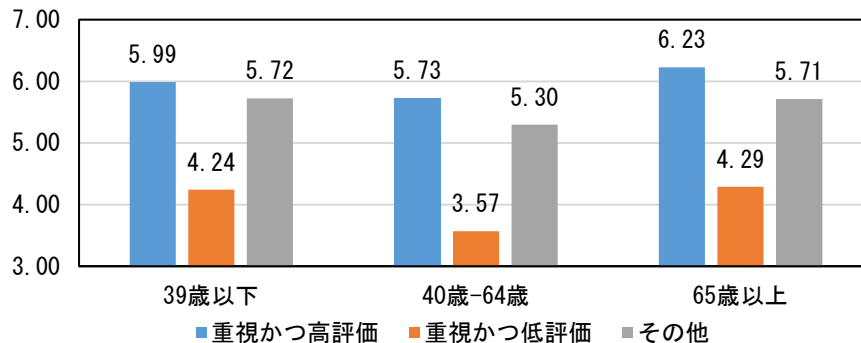
なっている。また、年齢階層が高くなるにつれて「いずれもなし」の割合が低くなっており、高齢層の「健康状態」への関心の高さがうかがえる。

図表 1-4-12 「健康状態」の年齢階層別割合（重視事項・評価事項）



「重視かつ高評価」のグループと「重視かつ低評価」のグループの年齢階層別「健康状態」満足度をみると、どちらのグループも高齢層の分野別満足度が最も高く、ミドル層が最も低くなっている。

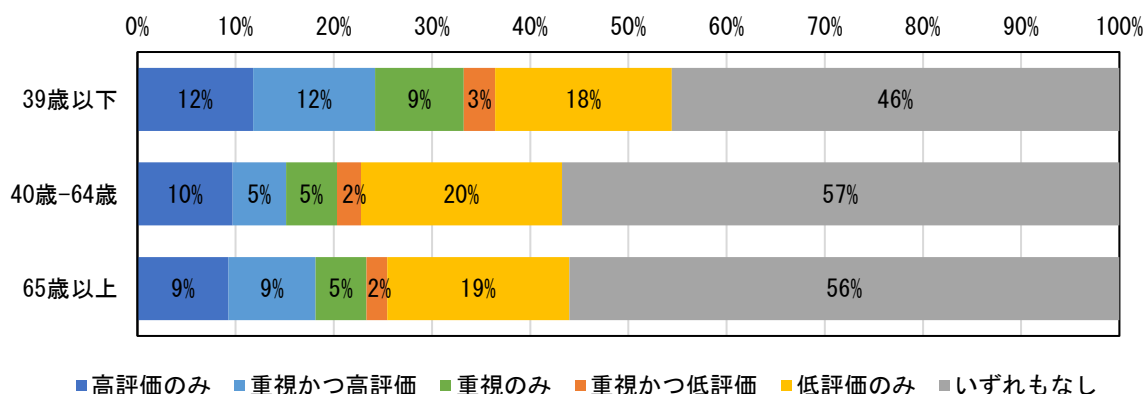
図表 1-4-13 年齢階層別「健康状態」満足度（重視事項・評価事項）



（「社会とのつながり」の重視事項と評価事項の関係と分野別満足度）

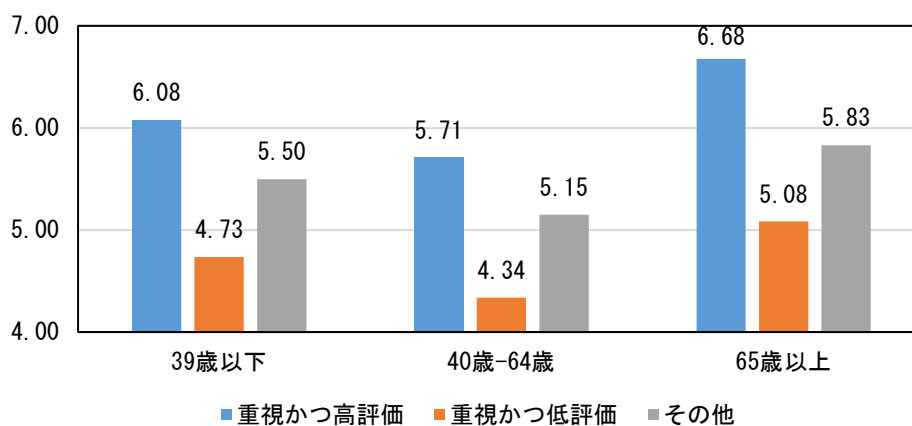
続いて、「社会とのつながり」の重視事項と評価事項の関係を年齢階層別にみると、「重視かつ高評価」「高評価のみ」「重視のみ」の割合は若年層が最も高く、若年層はミドル層や高齢層と比較して「社会とのつながり」を重視し、高く評価していることがわかる。

図表 1-4-14 「社会とのつながり」の年齢階層別割合（重視事項・評価事項）



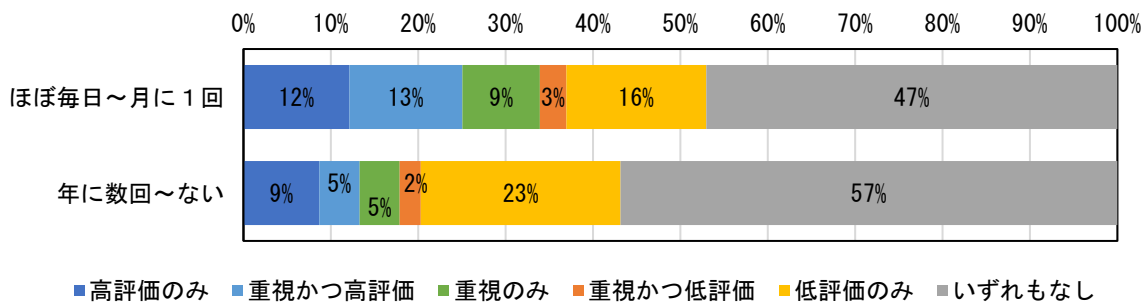
「重視かつ高評価」のグループと「重視かつ低評価」のグループの年齢階層別「社会とのつながり」満足度をみると、どちらのグループも高齢層が一番高く、ミドル層が一番低くなっている。特に、「重視かつ高評価」を選択している高齢層の満足度は顕著に高く、「重視かつ高評価」と「重視かつ低評価」の分野別満足度の差も、高齢層で最も大きくなっている。

図表 1-4-15 年齢階層別「社会とのつながり」満足度（重視事項・評価事項）



友人との交流は「社会とのつながり」の重視事項と評価事項とどのような関係があるのか確認すると、友人との交流が月1回以上ある方が「社会とのつながり」を「重視かつ高評価」とする割合が高く、年に数回以下の方が低評価とする割合が高い。

図表 1-4-16 「社会とのつながり」の友人等との交流頻度別割合
(重視事項・評価事項)



「重視かつ高評価」のグループと「重視かつ低評価」のグループの「社会とのつながり」満足度を友人との交流の頻度別にみると、友人等との交流が年に数回以下の場合、「社会とのつながり」を重視としても分野別満足度は低く、友人等との交流の頻度は、分野別満足度に大きな影響を与えていることがわかる。

図表 1-4-17 友人等との交流頻度別「社会とのつながり」満足度
(重視事項・評価事項)

